



広島大学附属福山中・高等学校

Hiroshima University High School, Fukuyama



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

平成27年度～令和元年度指定

スーパーグローバルハイスクール

研究開発課題研究指導事例集

瀬戸内から世界へ！世界から備後へ！
—グローバルイノベーションと合意形成を柱に—



令和元年11月



HIROSHIMA UNIVERSITY

研究開発課題研究指導事例集

目次

スーパーグローバルハイスクール（SGH）の取り組みの概要	1
------------------------------	---

4年生 体験グローバル

テーマ	指導教員	
ブランディング in 福山	川路智治	5
日本企業の世界進出	松尾砂織	6
人工知能・ロボットと現代社会	田野原佑美	7
障がい者雇用率向上への提案	見島泰司	8
リサイクルから新時代へ	高橋由美子	9
味噌の可能性 — Good MISO, Good Life —	瀬戸口茂久	10
世界の貧富の差をなくすために ～経済発展をするには何が必要か～	丸本浩	11
フリースドライが作る未来	西山和之	12
福山市の子育てによるブランディングと世界への発信方法の提案	藤浪圭悟	13
—「子育てのまち ふくやま」を目指して—		
エアコンの使用法改善で地球温暖化抑制	田中伸也	14
新しい避難生活の提案—過去の災害から学び教訓を生かす—	野田真美	15
企業スポーツのこれから	阿部直紀	16
広告と私たちの暮らしとのよりよい関係とは何か	井上泰	17
「KAROSHI」 in japan 日本人は働き過ぎ！？	信原智之	18
ムスリム観光客増加によるイスラム文化理解への取り組み	大江和彦	19
福山市PR動画の効果的な活用のための研究～広告の力をかりて～	蔭山映子	20
自動運転の実用化による社会変化に関する研究	山下雅文	21
福山市のトレー回収率向上のために	合田大輔	22
女性の社会進出（タイ研修）	甲斐章義	23

5・6年生 提言

テーマ	指導教員	
子どもたちを守れ！—公園の遊具の「ハザード」—	三宅理子	25
福山のバラと産業	岡本英治	26
日本の医療制度とかかりつけ医について	後藤俊秀	27
地域医療と女性医師	高田光代	28
女性の社会進出	川中裕美子	29
砂漠に住む	中村勝	30
農・畜産業と地域の活性化	實藤大	31
人工知能（AI）が私の生活をいかに便利にするか	小茂田聖士	32
農業界に若者を呼び込むために	山名敏弘	33
現代人の姿勢の改善のために	濱中直子	34
中学校運動部活動はこれからどうあるべきか	山口信介	35
地方創生には何が足りないのか	大方祐輔	36
フェアトレードの現状と今後	上ヶ谷友佑	37
日本は「シルバー民主主義」化した社会なのか	辻本成貴	38
ファッションから見る環境問題	甲斐章義	39
食糧不足にどう立ち向かうか	下前弘司	40
現在の小・中学校教育におけるLGBTの扱いとこれからのについて	金尾茂樹	41
農家の収入アップ	蓮尾陽平	42
ふるさと枠はうまく機能するのか	金子直樹	43
Global Society and Japan： A Questionnaire on intercultural communication between Japan and Australia	甲斐章義	44
(オーストラリア研修)		

スーパーグローバルハイスクール（SGH）の取り組みの概要

1. 研究開発課題

瀬戸内から世界へ！世界から備後へ！ーグローバルイノベーションと合意形成を柱にー

2. 研究開発の目的・目標

(1) 目的

グローバルリーダーには、文化などの多様性を認め、それぞれの個性を活かしてより良い社会を構築しようとする資質・能力が必要となる。そこでは、グローバルとローカルを併せ持つ「グローカル」な視点からのイノベーションが求められる。ここでのイノベーションとは、確かな基盤と柔軟な発想による自己変革を通して、新しいアイデアを生み出して社会的意義のある新たな価値を創造し、社会的に大きな変化をもたらすことを意味する。本研究開発では、「地域」の問題を出発点に「世界」を考え、「世界」から「地域」を見つめ直すことにより、地域に根ざしグローカルな視点からのイノベーションを生み出して貢献する、グローバルリーダー・地方創生リーダーを育成する。資質・能力の面では、クリティカルシンキングを基盤にした「合意形成」能力の育成を柱とする。当校では、グローバルリーダーとしての生徒像を以下のように設定し、このような生徒を育むことを研究開発の目的とする。

◇「自由・自主」の精神

社会や地域に貢献できることを誇りとし、自らの設定した目標を実現するために、進んで新たな知識や能力を獲得し、自ら段取りして積極的に行動できる生徒

◇「基盤となる教養」の獲得

バランスのとれた全人的な教養と、アイデンティティやコミュニケーション能力を身につけた生徒

◇「クリティカルシンキング」の実践

適切な基準や根拠に基づき、論理的で偏りのない思考をし、課題を発見し、よりよい解決に向けて地域に根ざした俯瞰的な視点から、複眼的に、より深く思考できる生徒

◇「問題解決」の経験知の蓄積

自ら設定したグローカルな課題を、他の生徒等と情報を共有し協調・協働しながら、創造的に解決する経験知を蓄積した生徒

◇「他者へのまなざし」の体得

自らの利益の主張だけではなく、他者の立場や状況を思い、異文化を理解し、双方が納得できる「合意形成」をめざして行動できる生徒

(2) 目標

経験知の蓄積のない生徒をいきなり海外へ連れ出しても、成果は得られない。グローバル社会で生きて働く力となる経験知の蓄積のため、以下の4項目を本研究開発の目標とする。

- 1 実地調査や協働体験を重視した課題研究「グローカルプログラム」の開発
- 2 「合意形成」を柱とする、21世紀型能力を育成する中高一貫カリキュラムの開発
- 3 課題研究等の質的向上のための、企業や大学等との連携・協力方法の開発
- 4 資質・能力の評価、ならびにカリキュラム評価の方法の開発

4. 課題研究「グローバルプログラム」

経験知蓄積プログラムである課題研究「グローバルプログラム」は、1年（中学1年）から6年（高校3年）の学年進行で取り組んでいるプログラムで、課題研究について「研究の方法を学ぶ」「解決の技を身につける」「研究の実践」の3ステップで活動を行っている。これらの活動を通して、身近で具体的な課題から複雑で多様な価値観の対立がみられる社会的課題まで、発達の段階にあわせた研究を実践している。また過去の課題を整理し、日々改善を行っている。特に4年（高校1年）「体験グローバル」と5・6年（高校2・3年）「提言」では、生徒自身が定めた課題に対して探究を行い、その活動結果をプレゼンテーションやポスター、論文の形にして発表している。

4年の「体験グローバル」は、SGHのプログラムの入り口という位置づけで課題研究を実践している。外部講師による講演や課題研究の進め方・研究のまとめ方の講義を通して、事象に対する複眼的な視点を見につけたり課題を掘り下げたりしながら課題を設定し、様々な調査・分析活動を行う探究をグループに分かれて行っている。ここでねらいとする能力・態度は以下の通りである。

- ・複眼的な視点を身につけられるよう、課題研究を進めるために必要な様々な活動に対して意欲的に取り組むことができる態度
- ・取り上げる事象の問題点を読み解き、そこから導き出される課題を自ら設定して研究を進め、まとめることができる能力
- ・班でまとめた課題研究を適切かつ聞き手に効果的に発表することができる能力

5・6年の「提言」では、4年で履修した「体験グローバル」で学んだ複眼的な視点や、探究の方法を活かして、生徒自らの問題意識に基づいて、社会的な事象から課題を設定し、グローバルな視点を持って研究を進め、発表し、他者との議論を通して互いに研究を深める活動を行う。「提言」では、個人研究として進めることと、研究を振り返り、研究のプロセスや考察を再検討したり、新たな課題をみつけたりする段階まで深めることを目標としており、これらの点が「体験グローバル」との違いとなっている。5・6年の「提言」は、「創造」との選択コースである点も踏まえ、特に、以下の能力・態度の育成をねらいとする。

- ・問題を発見・解決する力・・・各自の問題意識に従って、自ら課題を設定し、適切な方法で研究を進め、まとめていくことができる。
- ・省察する力・・・研究を各段階で振り返り、プロセスや考察などが複眼的で適切なものかについて問いなおして、改善していくことができる。
- ・表現・議論する力・・・研究の各段階で、的確にまとめて発表し、他者との議論を通して研究を深めることができる。

当校の課題研究である「体験グローバル」「提言」の特徴の1つに、すべての教員が課題研究にかかわるという点がある。これまでのSGH4年間で当校の多くの教員が課題研究の指導に携わってきており、その実践事例も多岐にわたるようになってきた。もちろん、それぞれの教員が指導する内容は自分の専門分野であるとは限らない。というよりは、自分の専門分野でない場合がほとんどである。そのような中で、それぞれの教員がどのように課題研究を指導してきたかを事例集としてまとめることで、教員間でそれらの多様な指導を共有し、振り返って自らの指導を充実させることをねらいとしてこの事例集を編纂した。また、この事例集が他校の先生方の参考になれば幸いである。

4年 体験グローバル

事例（体験グローバル）

テーマ

ブランディング in 福山

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<ul style="list-style-type: none"> ○「ブランディング」を研究したいが、実は「ブランディング」を知らない。 ・「ブランディング」を研究したい意欲は高かった。 ・「ブランディング」という意味について説明はできないが、「ブランディング」のイメージは持っている。 ・ブランディングの実例を示すことができない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○メンバー5人に共通した『言葉の意味』や『イメージ』を持たせた。 ・「ブランディング」の意味を調べさせた。 ・ブランディングの具体を知るため、『成功したブランディングの例』『失敗したブランディングの例』について調べさせた。 ・調べた内容を共有させた。
課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○ブランディングの対象が決定しない。 ・ブランディングする候補として「福山の名産品」「本校の食堂メニュー」「本校の校章が入った文房具」があがる。 ・目的がブランディングすることになっており、ブランディングの先にある、明らかにしたいことが明確でない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○研究の目的を明確にさせた。 ・『候補とした商品の現状』を調査させ、その商品をブランディングする意義を検討させた。 ・ブランディングの何を研究するのかについて検討させた。
仮説の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○ブランドイメージに着目した。 ・ブランディングの対象が「福山のバリリップクリーム」「バラ饅頭」に決定した。 ・研究目的の「どんなブランドイメージをもたせればよいか」について仮説を立てて、仮説を検証するための調査をすることに決定した。 	<ul style="list-style-type: none"> ○個人で調べ、その成果をグループで協議するスタイルの確立。 ・授業時間は50分の制限があるため、調べる活動は授業外で個人活動、授業中は話し合い活動のスタイルが身に付いた。
検証計画の立案 結果の処理	<ul style="list-style-type: none"> ○質問紙による調査の方法を知らない。 ・質問紙を作成したが、質問紙の作成方法が自己流のため、回答や集計がしにくい質問紙であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○質問紙による調査の方法を知らせる。 ・質問紙の見本を提示し、質問紙の作成方法と調査の方法を伝えた。
考察・推論	<ul style="list-style-type: none"> ○得られた結果から、どのような考察をすればよいか分からない。 ・結果の読み取りはできるが、考察ができない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○考察の例と方法を知らせた。 ・研究の目的を確認させた。 ・目的を達成するために『得られたデータをどのように説明するか』を協議させた。
まとめと今後の展開	<ul style="list-style-type: none"> ○研究内容を論文にまとめた。 ○研究内容を発表するためのプレゼンテーションを作成した。 	<ul style="list-style-type: none"> ○『目的と結論に整合性があるか』や『論調が整っているか』をチェックした。 ○完成したプレゼンを確認し、図表に修正を指示した。

※課題研究の指導をする時に心掛けていることがあります。

それは、『知る活動・調べる活動は授業外に個人でやらせる』『決定するための活動・検討する活動』は授業内にグループでやらせることです。

そうすれば、授業内に活発な議論ができ、その結果から次への課題が得られ、充実した授業の積み重ねができると考えています。

事例（体験グローバル）

テーマ

日本企業の世界進出

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	・日本企業が世界進出を行うべきであると議論をしていたが、根拠が曖昧な状況だった。データ収集を行うと生産年齢人口の減少に関する調査結果があり、国内だけの事業では、売り上げが下がる恐れがあると考えた。	・生徒が議論の様子を受けて、最初に現状を把握することが早急だと思い、世界進出をすべきだと考える根拠と、その主張を裏付けるデータを収集するように助言した。
課題の設定	「高品質を保ちつつ、ニーズに合った商品を作ることで海外企業との差別化をはかる」と「10年後を見越した戦略をし、現地の人材確保を安定させる」という2つの提案を考えさせた。	・多角的な視点を持って提案を考えてほしいと思い、そもそも日本企業にとって、世界進出が企業利益につながるのかという視点も考えるように助言した。
仮説の設定	・世界進出している企業ランキング調査から、日本は一社しかのっていないため、世界進出の方法に問題があるのではないかという仮説を立てた。	・個人の見解にとどまらないように、客観的なデータを収集した上で、課題設定を行うように指導した。
検証計画の立案	・インターネットを用いた閲覧に頼っていたので、企業へのアンケート調査を薦めたが班内で協議した結果、インターネットと書籍でデータを収集することに決定した。	・インターネットだけに頼らず、可能ならば企業へアンケートや書籍を用いて情報収集することも奨めた。
結果の処理	・班内で役割を分担して収集したデータをグループ内で検討した。 ・発表に向けて、第三者に対して正しいデータを示しているか、分かり易い表現になっているか、グラフや図の信憑性等を確認した。	・インターネットから収集する場合は、信憑性の高いものを使用するように助言した。また、閲覧した日時を記録取るようにも指導した。
考察・推論	・日本企業は海外の工場を「日本化」することによって成長させたが、異文化を理解することと、その国々に応じた対応が必要であると考えた。予算、アイデア、投資の他、特に人材の育成に力を入れることが企業の成長につながると考えた。	・文章にまとめる際は、分かりやすい表現になっているか、グラフや図は適切に使用されているかなど、発表に向けて検討すべきポイントを示した。
新たな展開	・研究内容を論文の形にまとめるとともに、成果発表会に向けてのプレゼンテーションの準備を行った。 ・他のグループと質疑応答を行った。	・論理的な内容になっているかを確認した。

※はじめて課題研究に取り組む生徒にとって、「課題は何か」が明確になるまでに多くの時間を費やしていた。しかし、研究当初曖昧だった内容は、課題を設定し、その根拠となるデータの収集・分析を行いながら研究を進めていくと、提案内容が明確になり、班員間の協力体制も強化されていったように感じた。

事例（体験グローバル）

テーマ

人工知能・ロボットと現代社会

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	○未来の産業構造に興味を持ち、「ロボット」「AI」「人工知能」をキーワードとして選び、現状について調べた。 幅広く調べているため、現状を把握できるものの、そこから課題の把握まで至らない。	○調べてきたことをまとめて報告させることにより、調べきれていない不足している情報に気付かせた。 ○対象となる分野が広いとため、それぞれ分野を絞って情報を検索し、課題を見つけるよう助言した。
課題・仮説の設定	○未来の産業構造が抱える課題をみつけないと考えるが、幅広く想定できるため、その中で絞りきれなかった。また、課題をみついてもテーマが大きくなり、今回の課題研究のできる範囲での仮説の検証が難しいことに気付く。 ○最先端技術について身近なところで考えた時に、人工知能・ロボットなどの最先端技術・新技術に対して不安があることに着目し、課題を設定した。 ○最先端技術・新技術に対する不安は知識不足が原因なのではないかという仮説を設定した。	○生徒が想定した課題が幅広かったため、まず中身を整理することが、課題の設定につながるのではないかと考えた。生徒の考えを整理したところ、「技術の進展」と「それに対する現代人の不安」が出てきた。 ○分析の対象を生徒たち自身とし、高校生がどのように未来の産業について不安を感じているのかを考えさせ、課題の設定につなげることができるよう助言した。
検証計画の立案	○当校の高校2年生202人を対象にアンケートを作成して、最先端技術（人工知能・ロボットなど項目を絞る）に対するイメージ、意見を調べる。対象となった最先端技術の実態を調べて考察することにした。	○アンケート作成の指導では、特に質問項目で、文中の曖昧な表現をなくす、使用する用語の定義や専門用語には補足を加えるなど、回答者が答えやすいアンケートになるよう意識させた。
結果の処理	○アンケート結果をグラフ・表にして一つひとつの特徴を捉え、そのデータをどのように解釈するのかを考えた。	○解釈が偏らないように、生徒の解釈に対して、疑問を投げかけることで、何度も再考しながら最終的な解釈を決定するように指導した。
考察・推論	○アンケート結果と、それぞれ対象となった最先端技術の実態を調べて、不安につながる可能性があるのかを考察した。	○考察ではアンケート結果を解釈して考えたことと、生徒が調べた最先端技術の実態のつながりが明確になるように意識することを指導した。
参考 新たな展開	○発表のための準備では、自分たちの主張を明確に伝えるためにどのデータを使うかを考えさせて発表資料を作成した。	○発表では、研究結果の中から重点的に説明するデータを取捨選択するよう指導した。

※研究テーマとする課題が絞りきれないため、教員が生徒たちの意見を整理して課題研究として探究可能な課題の設定に至った例です。

事例（体験グローバル）

テーマ

障がい者雇用率向上への提案

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<p>○エフピコを訪問した際に、障がい者の雇用率が全国でも群を抜いて高いことを知る。</p> <p>○しかし全国的には、障がい者の法定雇用率を下回っている企業がほとんどであり、エフピコの事例は非常にまれなケースであることを把握する。</p>	<p>○エフピコのパンフレットをもとに、ホームページなどを利用して、全国の企業と比較するように指示する。</p>
課題の設定	<p>○なぜ、障がい者の雇用が進まないのか、その難しさについて考察する。</p> <p>○どのようにすれば、障がい者の雇用率が向上するのか、雇用率の高い企業の取り組み事例を参考にして、意見をまとめる。</p>	<p>○どのような課題を設定することで、解決策の提案まで導くことができるのか、その道筋を班のメンバーでよく検討するように話し合いをさせる。</p>
仮説の設定	<p>○障がい者の雇用が進まない理由や、障がい者の雇用率が高い企業が取り組んでいることについて、考えをまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社内での理解が低いのではないか。 ・障がい者が適応できる職場の環境を整えているのではないか。 	<p>○考えられる仮説を、挙げられるだけ挙げてみるように指示する。その中で、要因として可能性が高いものかどうか、意見を交換させる。</p>
検証計画の立案	<p>○障がい者の雇用が進まない理由について、論文や書籍などを読み、分析する。</p> <p>○障がい者雇用率の高い企業にアンケート調査を行い、その結果について分析する。</p>	<p>○障がい者雇用に関する論文や文献のうち、生徒が参考にしていないものを紹介する。</p> <p>○アンケートの中身について吟味し、担当の方が答えやすい内容になっているか一緒に検討する。</p>
結果の処理	<p>○書籍やアンケートの分析を行う。アンケートは 20 社に送り、そのうち 5 社から返信があった。アンケートの内容について、まとめる。</p>	<p>○返信されたアンケートの内容について、各社が共通しているものや、違っているものが何かをまとめさせる。</p>
考察・推論	<p>○雇用率の高い企業は、障がい者を戦力としていること、作業の明確化やマニュアルの整備といった共通点がみられた。障がい者が働ける環境を整えていることが考察できた。</p>	<p>○考察として、各社のアンケート内容が共通しているものは、解決策の提案として見合うもの、違っているものは企業の独自性であることを理解させる。</p>
参考 新たな展開	<p>○障がい者雇用率の高い企業が行っているノウハウを、どのように他の企業に伝えていくか、さらに研究を進めたい。</p>	<p>○今回の調査で足りなかったこと、調べきれなかったことが何か、グループで話し合いをさせる。</p>

※このグループの研究では、アンケート調査という方法をとった。企業からの返信は、企業の生の声として、大いに参考になった。返信の数を増やし、より汎用性の高い提案ができると、なお良かった。

事例（体験グローバル）

テーマ

リサイクルから新時代へ

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<ul style="list-style-type: none"> ○食品トレーのリサイクル状況に関心を持ち、リサイクルを行うことを考える前に家庭ごみを削減しないといけないという問題意識を持った。 ○家庭ごみに含まれる容器包装廃棄物割合の推移、発砲スチロールトレー回収および出荷実績量から、包装資材のごみが増加していることに関心を持った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○増加しているごみの中でも、包装資材が増加していることを示すデータが必要である。ごみ問題を改善するために、包装資材に関して提案していく意義が弱くなる。
課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○包装資材のごみを削減するための方法・取り組みを提案したい。 	
課題の探究	<ul style="list-style-type: none"> ○スーパー等で購入商品を入れるビニル袋を減らすことによって、どれくらいのごみ削減効果があるのかを調べる。 ○海外における食品包装と比較することによって、包装資材削減につながる方法がないかを調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ごみを減らすために成功した取り組みはないだろうか？取り組みを成功させた要因は何だったのか。 ○成功例を身近なところだけに限らず、海外での事例も調べてみてはどうか。
考察・推論	<ul style="list-style-type: none"> ○海外のスーパーや市場で一般的に目にする、食品の量り売りシステムについて考察する。 ○現在の包装から量り売りでの販売に変更した場合、特に衛生面が問題となる。 ○どのような食品であれば、量り売りに適するのかを考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○海外だけではなく、日本でも以前は量り売りが行われていた。（味噌、醤油、酒、など。豆腐は包装されずに容器を持参、野菜は必要な個数での購入などの販売形態があった）しかし、現在は量り売りの形態が減っている。量り売りのメリットばかりでなく、問題点について公平に考察する必要がある。
新たな展開	<ul style="list-style-type: none"> ○量り売りを行う場合の衛生面、人件費、購入にかかる時間を考慮し、精肉・鮮魚について、食品トレーを使わない真空パック包装で販売することを提案する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○真空包装によって削減できるごみの量やコストに関して具体的に比較できるデータがあれば、より効果的に提案を推奨できる。現在、精肉を真空包装とトレー包装の2種類で陳列しているスーパーが市内にあるので、リサーチに行ってみてはどうか。

事例（体験グローバル）

テーマ

味噌の可能性 — Good MISO, Good Life —

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	○一般的に和食はヘルシーであるといわれていることを切り口に、「和食と健康の関係」について研究の方向性を定めたが、どのように進めていけばよいのかを決めあぐねていた。	○「和食」の定義を求めるとともに、その対立概念として「西洋食」をイメージしていたので、その定義も明確にすることをもとめた。
課題の設定	○「和食は健康的な食といえるのか」というリサーチクエスチョンを立てたが、その問いをどう調べ、検証していくべきであるかというところで行き詰りをみせていた。	○和食がどのように健康と関わっているのを明確にする必要があるのではと問いかけた。その後和食を摂取することで病気にかかりにくくなる、特に生活習慣病へのリスクを減らすことができるのではないかという方向へ向かった。
仮説の設定	○健康を損ねる「病気」を「生活習慣病」と再定義することで、「和食は生活習慣病の発症を抑える働きがある」という仮説を立てた。しかし、一口に「和食」といってもいろいろなものがあるというところで行き詰まりをみせた。	○引き続き「和食」の定義を明確にすることを求めるとともに、和食のどのような特性が生活習慣病を予防するのだろうかということに注目させた。
検証計画の立案	○和食の定義を掘り下げることにより、「ヒトの血圧と植物性たんぱく質の摂取の関係」にたどり着き、食品を「みそ」に絞り、含まれる栄養素を調べ始めた。	○ヨーグルトをはじめとする発酵食品と健康とのつながりもしばしば話題に上るので、味噌を発酵食品という観点からも調べるように促した。
結果の処理	○味噌の成分と生活習慣病との関係で、実験がすでになされており明らかに関連性がありそうなものと、関連はありそうだが検討の余地が残されているものを整理した。	○明確に関連がありそうなものは一次資料を当たるように求めた。しかし「がん」との関連性に矛盾する箇所もみられたので、引き続き調査するように働きかけた。
考察・推論	○味噌と生活習慣病の関連性のある程度見出せたものの、「がん」に関しては明らかな相関が見られず、結論を出せないでいた。	○ひとまず「がん」は調査に含めず、他の生活習慣病（糖尿病・脳卒中等）を中心とする生活習慣病に絞って考えさせた。「がん」は時間が許せば取り組むことにした。
まとめと今後の展望	○生徒自身、今回の研究をすすめるまで、味噌の可能性について知らなかったことを振り返り、現在どのような取り組みが行われているかを調べ、またそれらが不十分であることを指摘した。最後に教育現場での普及について提案した。	○問題提起から本論、考察、結論にいたるまで論理の飛躍はないか、資料はすべて一次資料であるか、引用先は明確にしてあるかなどを確認させた。

※テーマ決め以外で難航した点は大きく2点。1つは言葉の定義を明確にしなければいけない点。言葉を再定義し、明確に使うことで問題点がクリアになることを学んだ。もう一つは仮説を立てた後、生徒は仮説通りに論が進むような資料をあつめたり、またはそのように資料を解釈したりする傾向があったという点。仮説通りに調査が進んでも、強引に結論づけず、客観的な視点を持ちまとめることを学んだ。

事例（体験グローバル）

テーマ

世界の貧富の差をなくすために ～経済発展をするには何が必要か～

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	○人口減少の実態とその影響について興味を持ち、人口減少の原因と、政府が取っている対策について調べてみた。	○日本では、すでに高度成長を経て経済発展の後にたどりついた人口減少（高齢社会）である。 ○世界の他の国と日本の比較を行ってみると興味深い視点が見つかるかも？
課題の設定	○日本と他の国との比較を行うと、世界の国々での貧富の差が非常に大きいことに気付いた。貧富の格差を是正することの方が重要ではないだろうか？	○誰にとっての課題なのか？ ○どのような問題点を解決するために、何について調査するのか。 ○調査方法は？
仮説の設定	○日本以外の国で、発展途上国が経済発展をした事例を調べて比較することにより、経済発展をするための条件を見出し、それを他の国に活用できれば、格差が是正されるのではないだろうか。	○経済発展を成し遂げた国の事例を調べ発展した要因を調べてみよう。その際、経済発展の要因の項目をいくつか立ててそれぞれの国ごとの特徴をつかむようにしよう。
検証計画の立案	○一人1か国ずつ分担し、経済発展を成し遂げた要因を調べる。 ○それぞれの国での経済発展をした要因について、他の国と比較して、共通点や異なる点を調べ、規則性があるかを検証する。	○5か国（アラブ首長国連邦、ベトナム、マレーシア、シンガポール、大韓民国）の情報を比較して、経済発展の要因の比較を行い、経済発展に必要な条件の検討を行う。このことから経済発展を目指す国への提言を検討する。
結果の処理	○以下の6つの要因の柱立てを行った。 ①外国企業の参入、②輸出産業の伸び ③外国からの資金援助、④教育水準の高さ、⑤社会基盤の拡充、⑥移民の受け入れ	○左の6つの要因以外にも、たとえば天然資源（石油や鉱石など）が算出するか、国内の政治は安定しているか（内戦などはないか）などの検討も必要である。
考察・推論	○急速なグローバル化により、外国との協力は必要不可欠である。 ○外国に協力してもらうための基盤を作るために教育が有効である。 ○観光資源や地下資源の有効活用する。 ○輸出を拡大し外資の資本投資を促す。	○考察でまとめた事項を、これから経済発展ができそうな国にあてはめて考えてみよう。 ○それぞれの国が経済発展するための提言としてまとめてみよう。
参考 新たな展開	○これから経済発展する可能性がある国として、 <u>リビア</u> 、 <u>中央アフリカ共和国</u> 、 <u>カンボジア</u> の3つの国を選び、それぞれの国での経済発展のための指針を提案する。	○論文ではそれぞれの国ごとに詳しく記述するが、 <u>成果発表会では、限られた時間で主張を伝えるために、事例として取り上げる国を1つに絞るよう</u> に指導した。

※最初は、日本における人口減少とそれに関係する問題点についての調査・考察・提言を行う方向で議論していたが、海外に視野を広げてみると、世界各国では貧富の格差による貧困の問題などが多くみられたので、この問題を解決するためには経済発展が必要不可欠だと考え、この課題を設定した。

事例（体験グローバル）

テーマ

フリーズドライが作る未来

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	・実地調査にて、アサヒグループ食品(アマノフーズ)を訪問し、「フリーズドライ」そのものを詳しく知らなかったことを確認し、フリーズドライ技術が発展していることに興味を抱いた。	議論が逸脱しないよう注意を促す。
課題の設定	・フリーズドライ、またはフリーズドライ製品で新たな物が提案できないだろうか。	具体的な課題設定にしても結論が得られるか不安そうだったので、無理に具体的な課題設定をさせず、大まかな課題設定で良しとした。
仮説の設定	・フリーズドライ技術、または製品で、新たな提案ができるのではないか。	
検証計画の立案	・様々なフリーズドライ製品の調査 ・フリーズドライに対するアンケート用紙の作成	・参考図書の紹介 ・アンケート項目のチェック
結果の処理	・アンケートの配布・回収・集計	仮説をふまえ、ふだんの生活を思い起こし、「こういうことがあれば良いのに…」と考えることをたくさん出すよう指示した。
考察・推論	・アンケートより、「便利」「使い勝手が良い」と言うイメージはあった。 ・一方、アンケートより、フリーズドライは知られているが、あまり使われてはいなかったことがわかった。 ・「提案」として、作る手間のかかるインコの餌や、フリーズドライ味噌汁などに計量カップを付けることなどを挙げた。	・アンケート調査から言えることには何か、本当に論理性があるかをチェックした。 ・「提案」に整合性があるか、確認をした。

※フリーズドライの現在を考え、新しい使用方法、製品を提案したいと言うところでスタートしたが、フリーズドライのより細部に対する理解が難しい物であったり、また、提案した製品がすでにあったりして、困難であった。一方、アンケートの結果を見ながら少ない時間で、班員同士は協力しながら進め、提案をする手法は学び取っていったのではないかと考える。

事例（体験グローバル）

テーマ

福山市の子育てによるブランディングと世界への発信方法の提案
 —「子育てのまち ふくやま」を目指して—

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<ul style="list-style-type: none"> ・福山市に将来、帰ってくる人が増えるには何か良いアピールポイントはないのか、班で議論。 ・実地調査にて市役所・ネウボラに訪問し、「子育て環境の良さ」に気づく。 	議論が逸脱しないよう注意を促す。
課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・「子育て環境の良さ」がどこまで認知されているか、また実際に保育園で働く人はどう思っているかを調査することを決める。 	具体的な課題設定にしても結論が得られるか不安そうだったので、無理に具体的な課題設定をさせず、大まかな課題設定で良しとした。
仮説の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・「子育て環境の良さ」はおおむね知られており、保育園での充実度も高いという仮説を立てた。 	
検証計画の立案	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート用紙の作成 ・インタビュー調査先の検討、及び質問項目の作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート項目のチェック ・インタビュー調査先の斡旋と訪問依頼 ・インタビュー調査先への引率
結果の処理	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの配布、回収、集計 ・インタビュー調査の整理 	より具体的な提案にするため、福山市と同規模の都市で「子育て環境の良さ」が認知されている都市を調べ、提案の材料にすることを提案。
考察・推論	<ul style="list-style-type: none"> ・「子育て環境の良さ」はあまり認知されていなかった。 ・ネウボラの浸透率も予想以上に低かった。 ・「待機児童0人」とは言うものの、希望の保育園に必ずしも入れる状況ではないことや、預かる時間も限られているという「子育て環境の課題」を明らかにできた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート調査やインタビュー調査から言えることは何か、本当に論理性があるかをチェックした。

※福山市の「子育て環境の良さ」を活かした福山市のブランディングを目標としたが、研究をしたことのない生徒にとって、課題を設定すること自体が困難であったように思う。しかし、アンケートとインタビュー調査を終えて以降は、研究内容が段々と明確になり、班員同士が協力して取り組んでいた。

事例（体験グローバル）

テーマ

エアコンの使用法改善で地球温暖化抑制

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<ul style="list-style-type: none"> ○学校で夏場のエアコン使用が限定されて、教室が暑い状況を変えたい ・課題設定の方向性①～④で悩む ①エアコンの効果的用法 ②利用者の意識 ③エアコンの機械的特性 ④校内での利用状況 	<ul style="list-style-type: none"> ○課題設定の可能性を探る方法の提示 ・課題ごとの人員配置 ・課題ごとの調査法整理 ・スケジュールと日程管理 ○ローカルな取組みをグローバルに適用させる方略について試問 ・エアコンの使用法を改善することが地球温暖化対策となる
課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○調べてきた各課題①～④のプレゼンテーションにより、課題を明らかにする ・設定温度、気密環境、クールシェアリング、エアコン利用時意識、基本的理解、電気式・ガス式エアコン、代替エネルギー、サーキュレーターetc. ○情報の共有・選択と意思決定 ・できるだけエアコンを使用しない方法を紹介することで成果を得たい 	<ul style="list-style-type: none"> ○プレゼンテーションの在り方の指導 ○課題設定の見通しの共有 ○合意形成のタイムキーピング ・いつまでに、何を決めるか、どんなデータを調べるか
仮説の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○仮説設定の具体的なアイデアが浮かばない ○見通しがたたない ○快適性を得つつ、エアコン使用を控えることができないか 	<ul style="list-style-type: none"> ○課題を解決するうえで、必要そうなデータを課題設定時の内容を見通して組み立てるように促す ・エアコンが地球温暖化に与える影響 ・エアコンの節電方法
検証計画の立案	<ul style="list-style-type: none"> ○関係資料の閲覧 ・ほぼインターネットに依拠 	<ul style="list-style-type: none"> ○できるだけ数値的エビデンスのある冷却効果を得る方法を調べる ○閲覧時のデータを参考として残す ○独自の調査の立案を促す
結果の処理	<ul style="list-style-type: none"> ○集めたデータをグループで比較・検討 	<ul style="list-style-type: none"> ○正しく分かり易い表現となっているか ・グラフ、参考文献、言語表現
考察・推論	<ul style="list-style-type: none"> ○地球温暖化と快適性のジレンマ解消のために、自然のしくみを取り入れることが有効 	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒の考察を多面的に分析 ・グリーンカーテン、打ち水の効果
参考 新たな展開	<ul style="list-style-type: none"> ○研究内容を論文の形にまとめプレゼンテーションの準備 ○他のグループとの交流 	<ul style="list-style-type: none"> ○論旨が伝わる内容になっているか ○新たな視点や不足について考えさせる

※校内のエアコン使用状況に強い課題意識を持っていたため、調べる内容についてはコンセンサスを得やすかった。一方で、何をどのように調べまとめるのか見通しが立たない様子であった。課題をフラグメント化し、1人1テーマで調べ学習を行うことで、全体の見通しを立てることができた。そのうえで、エアコンの使用法について学習内容の再構築を行うことにより、まとめ上げることができた。調べ学習を終えると責任が曖昧になってしまい、一部の生徒が頑張っ、周囲は何も考えずに追認する状況になった。事態の打開策として、まとめる内容を再度割振ることで、意欲が再燃した。

事例（体験グローバル）

テーマ

新しい避難生活の提案－過去の災害から学び教訓を活かす－

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<ul style="list-style-type: none"> ○福山市の企業等の講演の話から、「福山のブランド化」について関心をもち、研究をすすめたいと考えた。 ○福山市の歴史や観光地を調べアピールできる内容を見いだそうとしたが、具体的なポイントが絞れなかった。 ○「西日本豪雨災害」の経験から、災害後の生活・避難所での生活環境に着目して研究の方向を変えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「ブランド化」の定義をどのように考えるのか、福山市について調べる中で、何に絞って検討するかについて、話し合わせた。 ○避難所生活に研究の視点を決めたところから、福山市にのみ着目するのか、日本の他市町村の取り組みとの比較や他国の取り組みとの比較を調べてみることを助言した。
課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○災害が起きた後の生活について調べる中で、災害関連死やスフィア基準についてより深く調べることにした。 ○災害関連死について知る中で、本来助けることができた命が助けられなかったことに心を痛めた。 ○被災後の生活の拠点となる避難所の生活で活力を見いだすにはどのような環境であればよいかを考えることにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ○日本で起きた災害時の避難所生活の変化、その要因を調べることを助言した。 ○日本の避難所生活をスフィア基準に照らし合わせたときに、課題となる点について話し合わせた。 ○調べる視点が広がっていたので、避難所生活の中で何について考えるか、そのことをよりよくするための視点を2～3に絞るとよいと助言した。
仮説の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○災害関連死を防ぐために、“睡眠”と“食事”の環境をよりよくすることが有効であると考えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○睡眠、食事の環境とは、具体的にどのような環境を指すのかを考えさせた。
検証計画の立案	<ul style="list-style-type: none"> ○福山市の避難所の現状把握のためのアンケート、スフィア基準と福山市の避難所の現状の分析を基に、課題を明確にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○アンケート作成において、アンケートの目的から質問内容を考え、導き出したい事柄を引き出すための質問の設定やその後の分析方法の検討を助言した。
結果の処理	<ul style="list-style-type: none"> ○webなどで得られた情報や、福山市に行ったアンケートの分析、スフィア基準との関連性をまとめた。 ○結果を基に、新たに4年生生徒全員に『食料の備蓄』に関するアンケートを行い分析し、福山市のアンケートとの関連性をまとめた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○分析した視点が明確になるようにまとめることや分析した結果から得られる課題など明らかにすること、用語の定義を明確にすることを助言した。
考察・推論	<ul style="list-style-type: none"> ○スフィア基準と比較すると、“睡眠”環境は一定の対策ができていますが、“食事”について、福山市の考えと住民の実態にはズレがあることから、食料備蓄について新たに提案することにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ○結果分析をする中で、新たな疑問が生まれ、より深く調べていくためにアンケートを実施することにおいて、援助・助言を行った。
新たな展開	<ul style="list-style-type: none"> ○現状把握をする中で、より明確な視点が絞られ、新たな提案へとつなげた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○結果分析する中で、仮説から新たな視点での提案につながった経過を分かりやすくプレゼンすることを助言した。

事例（体験グローバル）

テーマ

企業スポーツのこれから

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の設定	<p>○アサヒグループ食品へ訪問した際に、「天野スポーツ財団」の支援事業について興味を持つ。</p> <p>○不景気で企業のスポーツ支援が縮小傾向にある中で、企業とスポーツの新たな関わり方がないかと考え始めた。</p>	<p>○各企業がどのようにスポーツを支援しているのかについて、新聞や書籍、インターネットを活用して幅広く事例を集めるように助言をした。</p>
仮説の設定と検証計画	<p>○企業とスポーツがどのように関わってきたかについて、歴史的変遷をたどることで、新たな関わり方を提案できるのではないかと考えた。</p> <p>○主に学術論文を中心として、文献を集め、レビューをしていくこととした。</p>	<p>○文献の検索方法についての助言をした。</p> <p>○先行研究の信頼性について、より高い文献を集めるように助言した。（インターネット検索ではなく、論文や書籍からレビューをすること。）</p>
結果の処理と考察	<p>○文献をもとに企業スポーツの定義、歴史、現状をまとめた。そして、考察として「企業は株主や社員と一緒に、スポーツを『見る』ことや、『支える』ことを行っていくべきである。」と提言をした。</p>	<p>○「事実」と「意見」が整理されているかについての助言をした。</p> <p>○「事実」に基づく「意見」となっているか、関連がなされているかを確認した。</p>
まとめ	<p>○研究の課題、目的、方法、結果を端的にまとめる。また、研究を実践した後に浮かび上がった課題について考える。</p>	<p>○実践してきた研究のまとめがわかりやすく記述することができているかの確認をする。不十分なところの校正を行う。</p>
発表準備	<p>○プレゼンテーションソフトで発表資料を作成する。また、その資料に合わせて発表原稿も作成する。</p>	<p>○発表資料に関して、文字だけの資料にならないように助言した。</p> <p>○データが適切に記載しているかを確認した。</p>

*指導に携わる中で、以下の課題があると考えられた。

① 研究課題の設定

どのような結果が想定されるか、ゴールを見据えた研究課題、目的を設定することが重要である。

② 研究方法の選択

文献レビュー、アンケート調査、フィールドワークなど、適切な調査方法を選ぶ必要がある。

③ 分析方法の妥当性

得られたデータをどのように分析（量的・質的）するかについて適切な選択が必要である。

事例（体験グローバル）

テーマ

研究の視点	広告と私たちの暮らしとのよりよい関係とは何か
具体的なテーマ	グループ1 広告の問題点に関する改善案—現代広告のメリットとデメリット— グループ2 CMが生活に及ぼす影響

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<p>(1) 広告媒体の種類が不十分。 テレビやネットなどは把握していたが、新聞や雑誌、ラジオや交通広告など幅広くは把握できていなかった。</p> <p>(2) それぞれの媒体の特徴が未整理。 それぞれの利点や欠点。どのような目的で媒体が選ばれているかなど、感覚的に理解していた。</p> <p>(3) 現代社会における広告の問題点や課題についての把握が不十分。 SNS上の広告が煩わしいなど生徒の生活感覚での問題点は指摘できたが、それが社会的に問題なのかや他にどんな問題があるかは把握できていなかった。</p>	<p>(1) 書籍やHPを紹介する。 ①『現代広告論 第3版』(有斐閣, 2000年) ②波田浩之『新版 この1冊ですべてわかる 広告の基本』(日本実業出版, 2007年) ③インターネット広告の規制についての消費者庁のHP</p> <p>(2) 現代社会における問題や課題。及び、それらについてどのような取り組みがなされているのかを調べ、まとめてみるようにアドバイス。厚生労働省の「広告ガイドライン」等, 紹介。</p>
課題の探求 (グループ内ミニ発表会を何度もやる)	<p>(1) 調べてきたこと, 読んできた本の内容をグループメンバーに説明する。 調べたことと他の生徒の調べてきたこととのつながりが分からなかった。</p> <p>(2) 何が課題なのかを探し, 課題を決定する。 自分たちの課題が, 他人にとっても課題なのかという視点で考えることができなかった。</p>	<p>(1) グループ内で分担して調べていったことも多く, それらをつなげて全体を見たり, 問題点を発見したりするようにアドバイス。</p> <p>(2) 生徒の生活実感に基づく課題を認めつつ, それがどこまで社会的に問題なのかを問うたり, 探求すべき問題であるということの蓋然性を説明する方法を考えさせたりする。</p>
考察・推論 (課題解決への道筋を考える)	<p>(1) 研究の手順を知る。 研究が初めてなので, 基本的な進め方について知らなかった。</p>	<p>(1) 事例研究のサポートをおこなう。 アンケートをとる, 論文を読むことなどをアドバイス。</p>
まとめと今後の展望	<p>(1) 研究内容を発表する準備。 (2) 研究の難しさと新たな課題に気づく。</p>	<p>(1) 論理の飛躍や根拠のない主張にならないようにチェック。 (2) 新たな課題について問う。</p>

事例（体験グローバル）

テーマ

“KAROSHI” in Japan 日本人は働き過ぎ！？

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○グループの生徒が興味をもっていること、疑問に思っていること、という話題からスタートして会話を進めていき、どのようなテーマで研究していくかについて検討した。 ○生徒が興味をもった事柄を、家で調べてきて、その資料をもとにグループでの議論を行うという流れで活動を進めた。 ○「育児」「労働」の2つの観点に絞った後、最終的に「ワーク・ライフバランス」というキーワードが中心となった。 ○研究の具体を考えることについては困難な様子であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒の会話の中で挙げたキーワードから、関連する社会問題や話題を提示していきながら、会話を展開させた。 ○活動に用いる資料については、教員が事前に生徒からデータ・資料を預かっておき、印刷をして授業時に配布した。 ○生徒に、グループでの興味関心として、共通するキーワードは何か、ということを考えさせながら、研究の方向性を明確にさせていった。 ○何を明らかにしていきたいのか、対象者、研究手法をどのように設定するのか、などについて生徒と一緒に考えた。
調査内容の検討	<ul style="list-style-type: none"> ○アンケート調査・半構造化インタビュー調査の内容を検討した。 ○調査内容を検討していく中で、「働き方改革」が実際の現場ではどのように捉えられ、実行されているのか、その効果はあるのか、ということをも明らかにしたいと考えるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○研究課題の具体化、調査内容の検討について一緒に考え、助言をした。 ○研究を進める上で、探求すべきテーマが少しずつ変容していくことは自然なことであると説明した。
調査結果の処理・課題の探求	<ul style="list-style-type: none"> ○役割分担をし、調査結果をまとめ、発表の準備を進めた。 ○「過労死問題」、「長時間労働問題」に関して、自分たちの調査結果が役に立つ可能性があること認識し始めた。 ○研究の着地点が想像できるようになったため、班での意見交換も活発になり、他の視点からの指摘もできるようになってきた様子が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○調査結果の処理の仕方、考察について助言をした。 ○当初の計画よりも調査の実施が遅くなったため、冬休みの期間で、調査結果の処理、パワーポイント・レポートの作成（序論～調査結果まで）をすることを課題とした。 ○この研究がどのような価値をもっているのかについて生徒に説明をした。
考察・結論	<ul style="list-style-type: none"> ○考察と結論を検討し、パワーポイントを仕上げた。 ○クラス発表の後、反省点や質問・指摘箇所について検討した。 	<ul style="list-style-type: none"> ○研究の論筋が通っているか、他の視点で考えるとどうかを指摘し、助言をした。
新たな展開	<ul style="list-style-type: none"> ○クラス発表後の修正点を踏まえ、成果発表会で発表する準備を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○改善すべき点を指摘しながら、プレゼン方法について助言をした。

※過労死をなくすための長時間労働問題について、中小企業の労働者への調査を通して、解決策を提言しようとした研究に取り組みました。その結果、日本の労働文化や企業の経済的事実など、様々な要因が労働者を取り巻いていることが理解できるようになりました。また、研究を通して、生徒は論理的に物事を考えること、多角的な物事の見方・考え方ができるようになりました。

事例（体験グローバル）

テーマ

ムスリム観光客増加によるイスラム文化理解への取り組み

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<ul style="list-style-type: none"> 地方創生という視点から、広島県の経済の活性化のために、何ができるのか。 	<ul style="list-style-type: none"> 地方創生とは何か？ (各都道府県の取り組みを調べ、広島県と比較する。) インターネット検索に多く頼りすぎない。
課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> 全国的に、日本を訪れる外国人観光客が増加しており、各県ともに特色ある外国人観光客誘致を積極的に行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 外国人観光客は、どこに何を求めてやってくるのか。(特に広島県を訪問する外国人は?) 外国人を多く迎える自治体はどんな方針で、誰が何をしているのか。
仮説の設定	<ul style="list-style-type: none"> 世界第二位の宗教人口を持つムスリム国からの観光客誘致をさらに進めることで、地域創生の一翼を担うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ムスリム受け入れにはどのような課題があるか。 ムスリム観光客誘致は本当に地方創生につながるのか?
検証計画の立案	<ul style="list-style-type: none"> 「ムスリム」への異文化理解不足の現実を意識調査する。 「ムスリム」観光客が来日時に感じた宗教的課題を「ハラール」認証を普及周知することで解決する。 	<ul style="list-style-type: none"> 同世代の高校生への意識調査という限定された人々の意見であることを前提にアンケートを分析する。 ハラール認証の具体的な店舗（西条）の調査をすすめる。
結果の処理	<ul style="list-style-type: none"> ハラール認証の飲食店を広島に増やすための方策 広島県の特産品をハラール認証を経てイスラム教徒の多い国に輸出する方策 	<ul style="list-style-type: none"> 経営が軌道にのるまで、大きな経営努力を必要とする。 輸出国までの距離と時間・手続きなどさまざまな課題がある。
考察・推論	<ul style="list-style-type: none"> 食事と礼拝の対応はもちろん、一番根本的に必要なのは「外国人にとって魅力ある日本」であること 異文化理解を進めるため、「受け入れ環境整備に向けた知識啓発」と「ムスリム旅行者への情報提供」を重視すべき 	<ul style="list-style-type: none"> まず、JNTO(日本政府観光局)のデータなどを参考とし、その分析を通じて多角的な視野で学ぶ必要がある。 長期的研究計画に基づいた適切な分担と意見集約がもっと必要である。
参考 新たな展開	<ul style="list-style-type: none"> 「訪日ムスリム旅行者対応のためのアクション・プラン」(政府) 「ムスリムおもてなしガイドブック」(観光庁) 	

※班員どうしのコミュニケーションは比較的スムーズに行うことができた。

リーダーシップをとれる生徒がいるかないかで、班の意見のまとまりや完成度が大きく変わる。

課題設定と仮説の検証までの時間がかかりすぎる。各個人が行いたい研究を一つの研究にどう集約できるか、目的・内容だけではなく、方法においても各生徒の個性が生かされるよう指導すべき。

長期休暇における各自の活動計画を詳細に把握する必要がある。

推薦書籍をもっと積極的にするべきであった。各時間の活動時間のほとんどが、インターネットでの検索に費やされる。

事例（体験グローバル）

テーマ

福山市 PR 動画の効果的な活用のための研究～広告の力をかりて～

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	○講演と実地調査で、福山市にはオンリーワン・ナンバーワンの魅力がたくさんあることを初めて知った生徒が多くいた。 ○住民でありながら、または近隣住民であっても通学していながら、関心を持ってさえいなかったことを認識した。	○福山市の魅力（オンリーワン・ナンバーワン）を整理するとともに、福山市への観光客の傾向（人数、訪問地、滞在時間、土産物、交通手段など）について調べてみることを提案した。
課題の設定	○福山市の魅力を市内及び市外へ広報するためにはどのような方法が有効かを探究しようと考えた。 ○福山市が現在行っている施策はどのようなものがあるかを調べたところから停滞していた。	○福山市と同規模の他市町村で PR 効果を上げている例を調べ、その中から福山市でも実現可能であり、最も効果的であると思うものを1つに絞ってみてはどうかとアドバイスした。
仮説の設定	○大分県の PR 動画“シンフロ”の YouTube での視聴回数が 232 万回で、その広報効果によって観光客増加に繋がっていることに着目し、福山市の知名度アップのために PR 動画が効果的にはたらくと仮説を立てた。	○福山市の既存の PR 動画とその効果についてと*そもそも、PR 動画を視聴する動機についても調べるよう促した。
検証計画の立案	○本校4年生 176 名を対象としたアンケート調査をおこなって、PR 動画自体の魅力と、それを視聴してもらえる方法を探った。 ・既存の PR 動画の魅力について ・PR 動画を視聴した動機についてなど	○アンケート作成において、マジックワードに気をつけて、言葉の意味や定義の理解を確認させた。 ○アンケート作成において、結果から導き出したい情報を意識した質問事項の設定と回答方法も記述と選択肢を意識的に使い分けるよう助言した。
結果の処理	○アンケート調査から、福山市以外の自治体の PR 動画を自発的に視聴した者が 0 人だったことに着目した。 ○アンケートで得られた情報を探究テーマにどのように結びつけるか悩んでいた。	○得られた情報から、設定した仮説の検証に繋げるよう、その他の要素についても考察するよう助言した。
考察・推論	○アンケート調査から、PR 動画そのものの魅力も重要だが、それ以前に“視聴してもらえる契機”の方に主たる提案をシフトした。	○アンケート作成の過程や、得られた結果から探究テーマが変遷または焦点化することは自然なことで、これこそが探究的な学習であると認識させた。
新たな展開	○アンケート調査を更に精査し、“広告の力”が有効な方法だと気づき、提案に繋がった。	○サブタイトルの有用性について説き、研究テーマに付随させた。

*「調べ学習」ではなく「課題研究」にするために、「論理の組み立て」を意識させました。クリティカルな根拠に基づいた客観的事実を積み上げて、なんとか独自の見解に発展できるよう導きました。

事例（体験グローバル）

テーマ

自動運転の実用化による社会変化に関する研究

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<ul style="list-style-type: none"> ○企業への実地調査の話から、「就職の際に求められる能力」に関心を持ち、その方面での研究をしたいと考えた。 ○実地調査先と他の企業との違いや、海外企業の状況を調べたいと考えた。 ○企業情報などを調べたが、詳細な要素を見出すことができなかった。一方、金融をはじめ多くの職種がAIで置き換わる可能性があることが分かった。 ○「AIに対抗できる力」を探る方向に研究をシフトさせた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○実地調査では、「コミュニケーション力が重要」と話されていたことを基に、具体的にはどのような力かについて話し合わせた。 ○どのような方法で、調査をすることができるかを考えさせた。 ○人間の能力という視点から、AIへに関心が変化してきたので、「AIとはどういうものか」、「AIの良い点と悪い点」「導入により社会がどう変化するか」など多様な課題を考えさせた。
課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○オズボーン論文などの資料を集め、検討する中で、AI導入により将来多くの職業がなくなることを知り、ショックを受け、AIの研究者でない自分たちが、AIに対してどのように切り込んで研究ができるか大きく悩んでいた。 ○AIの身近な例として自動運転があり、その導入により、解決される課題、新たに生じる課題があるだろうという考えになり、研究により、新たな視点を見出すことができると考えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○AIの導入に関して、多方面からの論述がある点を知らせ、多様な資料を集め検討するようアドバイスした。 ○漠然とAIをテーマとしてしまい研究として視点が定まらず意欲をなくしていたので、より具体的なものに絞りこむ必要があると指導した。加えて、いろいろな資料を使って現状を分析して、新たな解釈や視点を提案することも、研究として十分意義があることを伝えた。
仮説の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○自動運転は、法律の整備と社会からの信頼を受けると、高齢化社会で非常に有効な手立てとなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自動運転で社会がどう変わるか、どのようなメリットが生じるかを考えさせた。
検証計画の立案	<ul style="list-style-type: none"> ○技術面、法律面、利用者側からの分析、特に自動運転に対する信頼度を調査することで、課題を明確にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○時間的制約もあるので、なるべく多面的になるよう視点を整理して、調査を分担するよう指示した。
結果の処理	<ul style="list-style-type: none"> ○webなどから得られた情報や、AIに対する信頼度についてのアンケート結果をまとめ、課題を整理した。 	<ul style="list-style-type: none"> ○それぞれの視点でメリットと現状の課題を整理し、自分たちの意見を加えて論文にまとめるよう指導した。
考察・推論	<ul style="list-style-type: none"> ○AIによる自動運転は、地方に住む高齢者において大きなメリットとなり、社会的課題の解決に貢献できるが、事故をした場合の責任問題が課題として残っていることが分かり、社会での認知と理解・議論が今後必要だとまとめた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○AI技術者・研究者や法律家として自動運転を考えるのではなく、一市民として、この問題をどう捉え、どのような視点を持つべきか、何が足りないかなどを考えさせた。

※ 関心を持ったテーマから、課題の大きさに「自分たちに何ができるだろうか」という悩みの段階を経て、より具体的な研究テーマまでたどり着いた班の経過です。研究の意義を確認する中で、進むことができました。

事例（体験グローバル）

テーマ

福山市のトレ回収率向上のために

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○福山市のトレ回収率とリサイクル率の向上のための方策を考える。 ・現在の福山市の取り組みの状況把握が十分でない。 ○トレ回収率とリサイクル率の向上が何につながるのか考える。 ・ごみ問題や埋め立て地問題との関連性についての根拠が十分でない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○意見交換の中で生徒の視野を広げる。 ・福山市だけでなく全国の状況を踏まえて考えていくことの重要性を理解させる。 ・市町村のトレ回収率やリサイクル率についてのデータの収集を促す。また、それらのデータとごみ問題や埋め立て問題との関連性について整理させる。
仮説の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○明らかにしたいことや明らかにできることを検討する。 ・アンケート調査を行いトレ回収やリサイクルへの意識を高めるための方策を提案することでトレ回収率やリサイクル率の向上につながるのではないかと考えている。 ・各市町村の取り組みの中で福山市に取り入れることが可能なものを明らかにすることでごみ問題や埋め立て問題の解決につながるのではないかと考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○仮説を立証するために必要なことについて助言する。 ・仮説の立証のために必要な情報は何かを一緒に考える。 ・信頼性の高いデータを収集する必要があることを助言する。 ・WEB上のデータだけでなく、市町村へのインタビューや生徒、保護者へのアンケートを行うことを促す。
検証計画の立案と結果の処理	<ul style="list-style-type: none"> ○質問内容やアンケート用紙の作成。 ・課題研究で明らかにしたいことを踏まえた内容になっていない。 ○レポートの大枠の作成 ・市町村への質問やアンケート結果を踏まえて何が明らかにできるのか意見交換をしながら大枠を考えていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○不十分な点を明確にしていく。 ・インタビューやアンケート調査を行うときの注意点についてアドバイスしながら、一緒に考える。 ・当初の課題や仮説との関係について意見交換をしながら明らかにできることについて考えていく。
考察・推論	<ul style="list-style-type: none"> ○発表資料(レポートやパワーポイント)の作成から研究成果を推考する。 ・意見交換から論理の妥当性や新たな課題を発見することができてる。 ・当初のテーマ設定からの変遷を説明することができるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○論理に筋が通っているか、多面的な視点で見るとどうなのか指摘する。 ・本当にこれでいいのかという形で質問することで発表資料について再検討を促す。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○研究内容を発表する準備を進める。 ○他の班との意見交換から様々な視点を持つことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○他の班との意見交流をする中で新たな視点に気づくことができるよう促す。

※トレ回収率向上のための方策を提言することを目的として課題研究を始めました。課題研究を進めていく中で、トレ回収率の向上だけでなく、ごみ問題や埋め立て問題の解決のために個人と企業がどのように対策を行っていく必要があるのかを考えるようになりました。また、課題研究を進めていく中で、物事を多面的にみるできるようになりました。

事例（タイ研修）

テーマ

女性の社会進出（タイ研修）

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<p>○タイ研修で取り組みたいことやその興味の深さにばらつきがある。タイについて知らないことも多い。</p> <p>○英語でコミュニケーションをとることへの欲求は強い。</p>	<p>○タイ研修に取り組むにあたって以下の2つについて調べる課題を出す。</p> <p>①訪問先のホーコス・タイランドについて調べる。</p> <p>②タイについて調べる</p>
課題の設定	<p>○各自が考えている課題はあるが動機としてはそれほど強いものではない。</p> <p>○興味の持ち方がそれぞれ異なるため、調べてきた内容を回し読みするだけで視野が大きく広がる。</p> <p>○質問づくりの活動を経験したことがない生徒がほとんどなので、一つ一つの作業についてそのルールや意味などを考え納得させながら進めていく。質問をつくる際のルールは以下の4つ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・できるだけたくさんの質問をする。 ・質問について話し合ったり、評価したり、答えたりしない。 ・質問は発言の通りに書き出す。 ・意見や主張は疑問文に直す。 <p>生徒の状況によっては1回の質問づくりの活動では十分に考えが発散・収束しないこともあるので、この活動を2回もしくは3回行うことも考えられる。</p>	<p>○調べてきた内容をA4用紙2枚程度にまとめてくる。タイ研修参加者全員で集まって調べてきた内容を回し読みすることで調査内容を共有する。</p> <p>○5人ずつの2チームに分かれる。</p> <p>○質問づくりの活動を行うことで研究課題の設定へとつなげる。質問づくりの活動から得られた3つの質問に共通する背景を考え、そこから研究課題を設定する。</p> <p>○質問づくりの活動では、発散思考である質問づくりで多くの質問が出ることが望ましい。そのために質問の焦点を十分吟味しておく。</p> <p>○質問をつくる際のルールそのものについて評価させるとその後の振り返りに役立つ。質問を作る際にはルールを守って活動を行っているかをチェックする。</p> <p>○質問に優先順位をつけることで重要な質問が何かを考えさせる。(収束思考)</p>
仮説の設定	<p>○優先順位の高い3つの質問からこのチームは女性の社会進出というテーマを設定することとなった。日本における女性の社会進出というテーマがかれらの共通な課題として浮かんできたという事である。</p>	<p>○優先順位の高い質問を3つ選ばせる。</p> <p>○それらの質問に共通する事柄や問題点について考えさせる。</p> <p>○女性の社会進出というテーマで事前学習を進め、タイでの交流やJETRO バンコクでの質問の準備を行う。</p>
実地調査	<p>○タイは日本よりも女性の社会進出が進んでおり、その要因としてタイ社会の寛容性があることを知ることができた。</p>	<p>○連携先企業ホーコス・タイランドやJETRO バンコクでタイでの女性の社会進出の状況やその要因について調査を行う。</p>
考察・推論	<p>○日本とタイとの違いとその要因について考察するとともに提言を行う。</p>	<p>○振り返って日本の女性の社会進出を阻害する要因について比較させる。</p>
参考	<p>「たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」ダン・ロスステイン, ルース・サンタナ 新評論</p>	

※質問づくりの活動を行うことで、自分たちの研究課題を決めるための合意形成を行い、全員が納得した形で研究課題を設定することができる。また、自分たちがなぜそれらの質問を選んだのかについて振り返らせることで、自分たちの課題も見えてくる。

5・6年 提言

事例（提言Ⅰ）

テーマ

子どもたちを守れ！－公園の遊具の「ハザード」－

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の設定	<p>○公園の遊具での事故防止のための方策を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仙酔島の公園で起きた木製アスレチックの丸太の破損により、4歳男児が転落し、重傷を負った事故から。 ・現在の福山市の取り組みの状況把握が十分でない。 <p>○遊具の安全点検が実施されていても、事故が発生する場合もある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遊びの価値や危険予測につながる「リスク」と「ハザード」の違いを整理した。 	<p>○意見交換の中で課題の範囲を整理する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公園といっても目的や規模の違いによって管理・運営団体が異なる。どの公園を対象にするかによって、方策のとり方が変わる。 ・事故原因は1つとは限らない。発生状況や原因についてのデータの収集を促す。それらのデータをもとに、誰（何処）に向けての提言とするのか。
仮説の設定	<p>○保護者が、遊具に潜んでいる危険性を理解していれば、子どもたちの事故はもっと防ぐことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・街区公園での遊具の事故防止のための方策を保護者の視点で考える。 ・そのためには、判断基準となる情報が必要である。 	<p>○仮説を立証するために必要なことについて助言する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実地調査と市町村へのインタビューとともに、Web上のデータも踏まえて考えることを促す。 ・提言対象とする遊具を明確にし、具体的な提言にする。
検証計画の立案と結果の処理	<p>○アンケート用紙を作成し、課題を明確にする。</p> <p>アンケートは、福山市公園緑地課と遊具の製造会社に依頼した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福山市の公園の点検方法 ・街区公園にある遊具の対象年齢 ・遊具が関係して起こった事故の件数や要因 <p>○アンケート調査やインタビュー内容、Webで得られた情報をまとめ整理した。</p>	<p>○不十分な点を明確にしていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インタビューやアンケート調査を行うときの注意点についてアドバイスしながら、一緒に考える。 ・当初の課題や仮説との関係について意見交換をしながら明らかにできることについて考えていく。
考察・推論	<p>○保護者の視点を4つあげ、街区公園にある代表的な遊具について、どこに気を付ければよいのかチェックシートを作成した。チェックシートの利用によって子どもが遊びに消極的にならないよう、「遊び」の中の「冒険や挑戦」といった子どもの発達にとって必要な「リスク」の見守り方に言及した。</p>	<p>○子どもが自ら危険を予測し、リスクへの対処ができることも大切。子どもの発達段階に応じて、保護者がこの問題をどう捉え、どのような視点を持つべきか考えさせた。</p>

※校外大掃除（学友会行事）の企画のため訪れた学校近隣の公園が閑散としており、子どもたちが利用するにはどうすればよいか研究を始めました。ライフスタイルや家庭環境等課題は多岐にわたり、安全面に絞ることで具体的な研究テーマにたどり着くことができました。

事例（提言Ⅱ）

テーマ

福山のバラと産業

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	○福山市が活性化されていないイメージを持っていた。 ・福山駅前の大型店が閉店したり、福山市の人口が減少したりしている感覚から福山市が活性化されていない現状にあると捉えていた。	○福山市の現状について、資料などをあたり明確な根拠をもって示すことができるように指導した。
課題の設定	○地方都市に人が集まるにはその都市の魅力を知ってもらうことが重要で、福山市の魅力を活かした街づくりとは何かを課題の設定にした。 ・課題の把握の中で第一に様々な人々に福山市の街を知ってもらうことが重要であると考えた。	○都市の活性化の問題は複合的に要因が絡むので、課題の設定範囲を絞り、焦点化が必要であると助言した。
仮説の設定	○福山の街の特色であるバラを活かした産業が持続可能な都市づくりに活かすことができないうか、仮説を設定した。	○都市の活性化には官民さまざまな取り組みをしている。産業と街づくりをベースにしてさらに焦点化が必要であると助言した。
検証計画の立案	○実地調査を実施して街づくりを活気づける生の声を集めることにした。 ・バラの形をしたお菓子など福山の歴史や特産物（品）を活かしたお菓子作りに取り組んでいる洋菓子店で実地調査を行うことにした。	○質問内容の確認、調査協力の依頼などの支援を行った。
結果の処理	○資料収集（文献調査）では分からなかった経営者の考えや思い、また他企業との連携の難しさを認識した。 ・企業の考えはそれぞれ異なり、また持続して取り組むためには利益を得て継続できなければならない。考えの違いなどによる連携の難しさを実感した。	○地元の特産物（品）を活かした企業の取り組みを実地調査で聞いたことは大きな価値があり、官民や企業連携などの難しさはあるものの、今後の取り組みへの大きなヒントが得られたのではないかと助言した。
考察・推論	○福山は歴史の街であり、歴史を活かした産業に取り組む、街そのものを知ってもらうことが重要であると考えた。	

※福山市の活性化の方策を提言することを目的に課題研究を始めました。課題研究を進めていく中で、焦点化し、最終的には産業と連携した持続可能な街づくりの課題設定になりました。実地調査を通じて、調べ学習では得ることができなかった持続していくための課題や問題点が分かったと同時に、解決への糸口も見つかり、生徒自身に探究する能力が高められたと感じます。

事例（提言 I）

テーマ

日本の医療制度とかかりつけ医について

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	現在の日本の医療制度における最も大きな問題点として、医療費の増大と医師不足の2点があることは把握できているが、それが国際的に見てどうなのかはまだ比較できていない。また、「医師不足」の具体的な中身が把握できていない。	まずは諸外国における医療に関する様々な統計データを集めて、日本における医療費の増大と医師不足が諸外国と比べてどうなのか調べる必要があるという点と、「医師不足」の内容にはいろいろあると思われるので、それらを公表されたデータを調べるなどして明らかにするように指導した。
課題の設定	日本における医療費の増大と医師不足の問題がどうやったら解消するかというテーマはあまりにも問題が大き過ぎるため、かかりつけ医制度というものに着目して考察を進めることに決める。	社会問題は様々な要素が複雑に絡み合っていて発生しているので、こうすれば解消するといった単純なものではない。自分の興味関心に基づいて考察の対象を絞ることはやむを得ないが、かかりつけ医制度に着目する理由は明確にした方がよいと助言した。
仮説の設定	かかりつけ医制度を充実させることが、無駄な医療費を押さえたり、医師の偏在を減らすための有効な施策の一つではないかと考え、それを明らかにすることを目標とする。	現実的には、一高校生が短期間に調査・研究する範囲には限界があるので、自分のできる範囲での調査・研究になるのは仕方がない。調べる対象の国も絞ることになる。
検証計画の立案	日英中豪各国のかかりつけ医制度の有無や内容について HP 等で調べるとともに、日豪では聴き取りやアンケート調査を実施する。特にシドニー研修では、現地の高校生や一般市民計 75 名を対象に調査を実施する。	データ数が少なく、統計的にはあまり意味はないと思われるが、その国の医療機関を利用する立場の人たちから直接かかりつけ医の利用についての現状を伺うことには大きな意味があると助言した。
結果の処理	かかりつけ医がいるかどうかの調査では、同級生 190 名で「いる」と回答した人の割合が 57%だったのに対し、シドニーで「いる」と回答した人の割合が 71%で、シドニーの方が高かったが、豪州が GP 制度をおこなっているにもかかわらず約 30%がかかりつけ医がいないという結果の方に着目する。	双方とも特定の地域の限られた人を対象にした調査なので、これらの数字に重きを置き過ぎず、大体の傾向を知ることができたことで良しとすべきである。
考察・推論	かかりつけ医制度や一般医 (GP) 制度の有無よりも、国としてその制度どれだけ整備し徹底しているかが、医療費の削減や医師不足の解消のカギを握っているのではないかと気づき、それで成功しているフランスの例に辿り着き、日本でのその制度の実現可能性を考察した。	言うまでもなく、国レベルの問題について高校生が調査・研究し、その解決策を提言するというのは実際にはかなり難しいことであるが、家庭で話題になった事柄に問題意識を持って調べることで何らかの結論に到達し、それを発表するという取り組みには大きな意味がある。

事例（提言Ⅰ）

テーマ

地域医療と女性医師

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握と設定	○医師不足・医療格差について解決する方法はないのだろうかと考えた。 ○医師不足といわれる中、女性医師の割合が低いことを解消することはできないかと考えた。	○意見交換の中で生徒の視野を広げる。 ・医療現場がどんな仕組みで成り立っているのか、海外の医療現場や制度の比較、また、女性医師が少ない原因は何かなど、まずは現状の把握を広く見ていくように促す。
仮説の設定	○地域医療の現場で、女性医師が活躍できる環境をつくれれば、医療格差を解決する方法の1つとなるのではないかと考えた。	○仮説を立証するために必要なことについて助言する。 ・地域医療の実情の把握 ・女性医師の離職の原因と課題 ・女性の就業についての他企業の取り組み ・現場の医師への聞き取り など
検証計画の立案と結果の処理	○聞きたいことを書き出し、質問内容を作成する。 ○女性医師が働く現場に伺い、現状や課題などの聞き取りを行う。	○質問内容を一緒に整理していく。 ・限られた時間で何を聞くのか、内容を整理する。 （地域医療、研修制度、女性医師の利点、就業課題など） ・課題について、女性医師の立場からだけでなく、男性医師の立場からも聞き取りができるように ・担当者に事前の連絡
考察・推論	○これまでの課題をもとに、聞き取り調査で確認できたことと他企業での取り組みの成功例や課題などをすり合わせ、医療現場で実践できることを探る。 ○医療の現場での解決策として、働き方、働く環境、医師の養成制度などに集約し、提言しようと考えた。	○得られた情報の整理と解決策として何が可能か、その視点について一緒に考える。 ○レポート作成にあたって、今回の研究で何が課題でどう解決し、提言しようとしたのかを振り返り、流れを整理するよう促した。
参考 新たな展開	○周囲の理解と協力が重要 医師という仕事と働き方について、性別や世代、また患者や社会の理解をどう進めていくか	○「女性が働きやすい」という視点で提言した内容は、周囲の人にとってもプラスな面があることに気づくように促す。

事例（提言Ⅰ）

テーマ

女性の社会進出

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	○女性の社会進出のさまたげになっているものは何か考える。 ・「女性の社会進出に関する課題」と言っても多くの要素があり、何を中心に考えればよいか迷っている状況。	○現状の課題をまず把握する。 ・最初からテーマを絞らなくてもよいので、社会進出に関する課題にはどのようなものがあるか、複数調べ把握するよう促す。
課題の設定	○行政の対応について課題を設定することにする。 ・待機児童の問題、男女の所得格差の問題、男性の育児休業制度の取得の問題、それに伴う職場の「空気」の問題、などさまざまな課題が考えられたが、福山市が現在行っている「ネウボラ」制度についての課題に決定する。	○課題を絞って設定するよう助言。 ・女性の社会進出については、その課題が多だけでなく、それぞれの課題が複雑に絡み合っていることも多い。調べたものの複数を扱おうとするのではなく、考える範囲を絞って研究した方がよいと助言する。
仮説の設定	○「ネウボラ」制度が生まれたいきさつ、利点、また課題があればそれをどう解決するかを考えていく。	○「ネウボラ」とは何かを調べるだけで終わらないよう、提言できることを考えさせる。
検証計画の立案	○女性が働こうとした時に何が課題になるのか、行政がそれについてどのような手助けをしているかを考える。 ○「ネウボラ」制度の実際についてフィンランドの制度と比較して考察する。	○実際に話が聞ける場所を紹介する。 ・福山市男女共同参画センターや子育て支援センターで話を聞くことや、資料の収集ができることを伝える。 ・教員や保護者など身近な「働いている女性」にアンケートを取るなどして話を聞いてもよいのではと助言する。
考察・推論	○現在の制度の利点とともに、課題を整理する。 ・出産した病院と、その後のかかりつけ医が異なることが、支援の分断につながっていることをまとめるが、それを解決するための提言にまでつなげるのが難しい。	○調べたことの発表だけでとどまらないように、課題の解決に向けてまとめるよう助言する。 ・課題を明確に説明させる。 ・他との比較をさせる。 ・制度が導入されていないところは何が原因なのか、考察するよう助言する。 ○同じグループの、待機児童問題、潜在保育士問題を研究している生徒とお互いの研究の確認、意見交換をさせる。
参考 新たな展開	○研究を発表する準備をする。 ・分かりやすい資料になるように作成する。	○伝わりにくいところ、わかりにくい図などがいないか、確認する。

※さまざまな課題設定が考えられるテーマで、複数の課題を研究し、提言していくのは難しいと考えた。さまざまな課題、について調べた上で、何をテーマに研究するかをまず設定させた。現状を理解するために、身近な人たちへの調査を実行できるよう支援できるとよりよかったとは思いますが、実際の育児支援の場に行って調査をすることを促すことはできた。

事例（提言Ⅰ）

テーマ

砂漠に住む

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	○砂漠の開発について関心を持ち、そのことに関連した研究を進めようとしている。	○砂漠の開発に関して研究する動機や目的について、SDGsとの関連を踏まえながら整理させた。
課題の設定	○人類が新たに土地を開拓しようとする理由の一つに「人口爆発」の問題を解決していかなければならないことを見出す。 ・その解決法の一つに火星移住計画なども考えられるが、それ以前に（映画監督、アニメーターとして著名な宮崎駿の意見から）地球上にある土地をもっと有効利用する手だてを検討するべきではないかと考える。	○マインドマップを用いて、テーマからイメージできるさまざまな事象を表現させ、豊かな発想を持つよう促すとともに、その多様な事象の中からこれから括目していく内容を見出させた。 ○砂漠開発をするメリットについて考えさせた。
仮説の設定	○砂漠に人が住めたり、農耕を営めるようにしたりすることで、「人口爆発」の問題を解決する一翼を担えるのではと考える。	○先行研究などさまざまな事例や取り組みを調べるよう促した。
検証計画の立案	○まずは、世界各地で行われている（行われてきた）砂漠の開発などについての事例を調べ、後に、その中で比較的成功したケースやそうでないケースなど総合的に考察していく予定を立てる。	○並行して、実際に砂漠は地球上のどのくらいの割合を占めているのか、実際の砂漠の様子など砂漠地域の特徴について調べるよう提案した。
結果の処理	○砂漠地域の特徴及び砂漠化に至る経緯、原因についてまとめる。 ○砂漠の開発についての事例を複数提示する。	○それぞれの砂漠開発事例におけるメリットやデメリットについて多面的に分析、整理させた。
考察・結論	○砂漠開発において比較的成功したケースや見出された課題などについてまとめる。 ・水資源の確保（ダムの枯渇化など）の問題 ・海水を淡水化する有用性とその活用 ・地下開発の可能性とその活用	○さまざまな砂漠開発の事例から、実現可能で有用なアイデアやエッセンスを結論としてまとめ、提言として発信するよう伝える。 ○現在、居住や農耕が可能な地域が、環境破壊などにより不毛な土地に変容（砂漠化）しないよう努めていくことも大切な視点であることも伝える。

※担当したメンバー4人はそれぞれ違うテーマであったが、折をみてお互い意見交換を行った。意見交換の場面では、自分の研究内容の現状を紹介する中で、これまで自分自身が取り組んできた研究内容について整理する機会となったり、他者からの発言や意見の中で、新たな視点やアイデアを見出す契機になったりするなど、自分自身の研究の深化につながる有用な時間を持てたと考える。

事例（提言 I）

テーマ

農・畜産業と地域の活性化

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<p>○農村の活性化, 農業の活性化という「やりたいこと」は明確だが, 何が課題であるのかは把握できていない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1人1冊書籍を読み, その書籍について説明し, 他の生徒はその説明に対して質問や意見, 提案などをおこなう。 ・出てきた質問などに対して, 書籍やインターネット等で調べ, 報告する。 ・具体的な活動を知るため, 実地調査(牧場1か所, 農産1か所)をおこない, 聞き取りや質問を通して課題を具体化する。 ・上記活動を通して明確化した課題のうち, どの課題について探求するのかを決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・データや情報の所在についてアドバイスする。とくに, 公的な統計は探し方が難しいので, こちらからどのような統計があり, 何のデータが載っているのかを一度は示しておく必要がある。 ・事例を1つ示し, その事例に類する事例を調べるよう促す。 ・実地調査に際しては, 訪問依頼などの手続きをおこなう。 ・インターネットや書籍では, 成功した点は示されているが, 失敗した点や課題は明確に示されることが少ないので, 実地調査では, 課題となっている点やその課題への対応策についてしっかり聞くことができるよう, 事前準備の段階で意識させる。
仮説の設定	<p>○立てた仮説について, 調べたことに基づき, 自らの視点から説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他のメンバーは異なる視点から意見を述べ, その意見に答えるために他の根拠を調べることで, より多面的な分析が可能になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員からも質問や意見をすることで, 生徒では気づきにくい視点についても意識させる。 ・そのためにも, 教員が探究テーマについて正しい情報を得ておくことは重要であり, 自らもテーマ学習をおこなう。
検証計画の立案	<p>○検証は不可能である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際に行われていない事例もある。 ・コストの点を考慮に入れると, そもそも検証不可能である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「検証できない」という問題は社会科学的探究では必ず発生することではあるので, 検証はさせない代わりに, 考察を十分におこなわせるよう指導する。
考察・推論	<p>○各自の課題に対して, 「完全な解決法」がないことに気づきつつも, 「多少なりとも可能性が高まる方策」を考え, その方法で残る課題点について整理する。</p> <p>○論文としてまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・解決するうえで, 諸要素について優先順位をつけ, 優先順位に沿った考察を進めるよう指導する。
参考 新たな展開	<p>○グループ内の他の生徒の研究と結びつけることで, より実行可能性が高まることに気づき, グループとしての改善策を作成し, プレゼンテーションをおこなう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中心軸となる提案(コンパクトシティ)にどう結びつけることができるか, 必要に応じて助言をおこなう。

※担当したメンバーは, 畜産, 農作業の効率化, 農村再生, 農業経済とそれぞれ課題の方向性は違っていたが, 実際には相互作用型になりうる課題でもあり, 2~3回に1回程度のペースで, それぞれの状況報告や質疑応答を実施した。また, 実地調査についても, 研究課題が異なる生徒も参加し, 違う側面からの質問を通して, 新たな知見を得ることができた。全体を通して, 探究するテーマが単体で成り立っているのではなく, 多様な要素との関係によって成り立っていることを学び取ることができた。

事例（提言 I）

テーマ

人工知能（AI）が私の生活をいかに便利にするか

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<p>○人工知能（AI）が話題になるニュースなどを日常生活の中で見聞きし、関心を持っていた。将来的に、「AI が人間の仕事を奪う」「AI が人間を超える」といった漠然とした知識を持ち合わせている状況であった。</p> <p>○AI の開発の歴史、活用されている場面、研究機関の報告、ニュースサイト、新聞記事等の情報収集を行い、考察の基礎となる情報の収集を行った。</p>	<p>○AI について、歴史的な経過を調べてみるように促した。</p> <p>○AI が活用されている場面を具体的に調べさせた。</p> <p>○AI にかかわる書籍、新聞記事、インターネットサイト、大学の HP などの検索により、情報収集を行わせた。</p>
仮説の設定	<p>○私たちの生活において、AI が活用される場面を具体的に想定し、AI 技術の活用されたモノがいかに自分たちの生活に溶け込めるか、活用することで生活が豊かになるかを考察する。</p>	<p>○調べた情報をまとめさせた。グループ内での交流を行い、意見交換をした。</p> <p>○調べた情報だけでは、ただまとめただけになるので、自分のオリジナリティのある研究にするための方向性を考えさせた。</p>
考察・推論	<p>○一日を想定して、勉強や仕事といった社会生活の AI 活用場面や、炊事、洗濯などの人間生活の面での AI の活用を具体的に考察した。</p> <p>○それを実現するために、現在の AI 技術の開発の状況から、さらなる発展が必要なものは何かを考察した。</p> <p>○AI の活用により、「私たちの生活が変わることのメリット・デメリット」、「人間が怠惰な生活を送るようになる」との指摘への考察を行った。</p>	<p>○自分自身で考えさせた AI の活用場面がいくつか出てきたので、研究としてまとまりのあるものにするため、「AI が支える一日の生活」を想定させてみた。</p> <p>○生活場面を想定すると、AI 技術が得意とする分野、苦手とする分野を分類できたので、AI 技術のさらなる発展が必要な分野を考察させた。</p> <p>○AI で生活が楽に送れるようになると「人間がだめになる」こと、「AI に人間の仕事を奪われる」ことへの指摘など自分なりの回答を考えさせた。</p>
参考 新たな展開	<p>○研究内容を論文の形にまとめる。</p> <p>○プレゼンテーション用の PPT の作成</p> <p>○ポスター発表用のポスター作製</p> <p>○発表における参加者との質疑応答</p>	<p>○結論に至る過程、論拠が十分か。</p> <p>○プレゼンテーションとして、他者の聞きやすいものになっているか。</p> <p>○質疑応答で予測される受け答えを考えさせる。</p>

※人工知能（AI）技術に関する話題であったが、生徒自身が開発をするのは、提言の時間内では難しい。そのため、調べたことをまとめるだけになってしまいそうになったが、「提言」としてまとめるために、一通りの情報を調べたのち、結論をどこに持っていくかを先に考えさせた。この結論を「人工知能（AI）が私の生活をいかに便利にするか」というテーマに設定した。この結論に至るために必要な証拠・論拠を集める（これまで調べたことも活用する）ことを提案し、研究が進めやすくなった。この「生徒自身の生活で活用される場面」を考察させたことは、具体的にイメージができて有意義であったと考える。

事例（提言Ⅰ）

テーマ

農業界に若者を呼び込むために

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	○食や健康問題に関心を持っている。 ・食文化や食糧問題、農業の振興、健康増進など関連分野でさまざまな課題があることに気づくことができた。	○個々の分野や問題について、多面的に捉えながら調べていくことを促した。 ・さまざまな問題点とその解決策について考えさせた。
課題の設定	○日本の食や農業をテーマとして取りあげたいという考えを持っている。 ・世界的にも注目されている日本の食を発展させるためには、農業の振興が不可欠であることを認識する。	○明確な提言が設定できるかどうかということを検討させながら課題を考察させた。 ・テーマと提言の大枠の組合せをさまざまな案を出しながら考えさせた。
仮説の設定	○農業の振興には後継者不足の克服が重要であることから、農業の後継者不足を克服するために、日本の農業に若者を呼び込むことが大切であるという論点で考察していくことにする。	○設定された課題が検証可能かどうか考えさせた。
検証計画の立案	○食糧危機への対処や和食の魅力の向上という点からも農業の重要性を捉える。 ○若者を農業に呼び込む方策を考える。	○グラフや統計資料など根拠となるものも明示しながら論を展開することを提唱した。
結果の処理	○まとめた内容をグループ内で発表し合い、出された疑問点や補う必要のある部分などについての考察を深める。	○若者が農業に具体的にに関わることができる方策を考えさせた。
考察・推論	○レポートの大枠を作成する。 ○グループ内での意見交換から理想とする解決策が明示できるようにする。	○農業に若者を呼び込むために行うことについて、実現のために必要なことを考えさせた。
まとめと今後の展望	○研究内容を発表する準備を進める。 ○ポスターセッションで出た質問によって、問題意識をさらに向上させることにつながった。	○論理の明確さや内容との整合性を確認させた。 ・パワーポイントの資料やポスターは、見る人にとって見やすくわかりやすいものになるように考えさせた。

※当初は、健康問題や食品文化など多岐にわたる分野から課題を探り、調査や考察を経てしだいにテーマを絞り込んでいった。魅力豊かな日本の食文化発展のためにも農業の振興が不可欠であり、そのために日本の農業に若者を呼び込むことが重要であると結論づけ、さらにそのための具体的な提言を設定することができた。

事例（提言Ⅰ）

テーマ

現代人の姿勢の改善のために

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	○現代人の姿勢の良さ／悪さについて考える。 ・「姿勢の良さ／悪さ」の定義が曖昧である。 ・「姿勢の良さ／悪さ」についてどの方向から考えるかが漠然としている。	○様々な方向から考える。 ・バレエ・能・楽器演奏などさまざまな方向から考えるよう助言した。 ・保健体育科の先生から話を聞くよう促した。 ・関連する図書を紹介し、学校図書館の活用を提案した。
課題の設定	○調べたことをもとに、「姿勢の良さとは何か」「姿勢をよくするための方法は何か」を考える。 ・「まっすぐ立つ」＝「体にとっていい姿勢とは言えない」ことがわかり、外見だけではなく呼吸法や筋肉といったことが姿勢の良さにどうつながるのかを考察する。	○調べた内容から、考えることの的を絞るよう助言する。 ・能や剣道などの伝統芸能や武道を調べていくうちに、「丹田」「深層筋」などのキーワードがみつき、これらを重点的に考えるように促した。 ・グループ内や他のグループと意見交換をさせた。
仮説の設定	○どのような方法で姿勢が改善されるかを具体的に考える。	○いくつかの方法の中から検証できるものはどれかを考えさせる。
検証計画の立案	○実践可能なストレッチや呼吸法を調べる。 ・「大腰筋」に関するストレッチを重点的に調べ、実践計画を立てる。 ・実際にストレッチを行う時間帯や日程などを考える。	○できるだけ具体的に計画を立てさせ、実践可能かどうか検討させる。
結果の処理	○グループ内で意見交換をして様々な視点から考え、矛盾がないように考えを深める。	○全く異なる分野に取り組んでいる生徒と意見交換をさせ、本人には気づかなかった点はないかどうか考えさせる。
考察・推論	○インターネットや書籍で調べた内容・メンバーの意見・自分の実践結果などをまとめ、今姿勢について抱えている問題と改善策を考える。	○調べた内容や実践結果の報告だけに留まらないよう助言し、調査やストレッチなどの活動を通じて考えたことをまとめさせる。
参考 新たな展開	○研究内容を発表する準備を進める。 ・活動を振り返り、論理的に説明できるように準備する。	○相手に伝わりやすい構成になっているか、論拠がしっかりしているかを確認させる。

※担当したグループの他の2名とは異なるテーマだったので、違った視点での意見を聞くことができた。最初は「良い姿勢を目指す」といった漠然としたものだったが、さまざまな手段で調べていくうちに知らなかった筋肉や方法を知り、課題に対して深く考察することができた。イメージだけではなく事実に基づき検証し、客観的にものごとを考えるという活動ができた。

事例（提言Ⅰ）

テーマ

中学校運動部活動はこれからどうあるべきか

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	○部活動を研究対象とするという漠然とした課題意識だった。部活動の何を研究するのかという具体化ができていなかった。	○昨年度の生徒の例を示すことでゴールをイメージさせた。研究対象を具体化することで単なる調べ学習ではなく提言になりうると助言した。
課題の設定	○他の生徒と話し合う中で研究対象を具体化することができた。スポーツ庁が出したガイドラインの趣旨をどう受容してどのように生かしていくかという研究の方向性が決まった。	○担当した3名の生徒が皆、研究対象が広がりすぎていたので、3人が自分の現状を紹介し合うことで自己を客観化させた。
研究計画の立案	○最初はアンケート調査を実施するかどうか悩んでいたようだが、単なる調べ学習に留まらない提言となること、当事者意識を反映させることを意識することで、アンケート調査を実施するという判断に至った。①現状や実態の把握、②ガイドラインの分析、③本校生徒へのアンケート調査、④中間発表会、⑤考察、⑥グループ内発表会、⑦まとめ（提言）という計画になった。	○昨年度の生徒の例を示していたので、その例に基づき、ゴールをイメージした上でそこから逆向きで検証計画を立案できるよう促した。 ○研究における当事者意識の重要性を説明した。単なる調べ学習にならないようにと伝えた。 ○アンケート調査の実施は業時間がかかるので押しつけにならないよう行うかどうかの判断は生徒に任せた。
結果の処理	○本校生徒へのアンケート調査を分析する中で、休養日が増えたことだけに注目が集まり、重要なガイドラインの趣旨が伝わっていないという現実が見えてきた。ガイドライン1冊すべてを読んだ。 ○中間発表会を実施することで自己のこれまでの研究を客観視できた。改善すべき点を指摘し合うことができた。	○アンケート調査を実施する前に、対象生徒に対してその目的を示したり目的外使用をしないことを説明したりするなどの作法が守れているかという視点を踏まえ、質問紙を添削した。 ○他のグループの生徒や教師も交えて、生徒6名、教師2名で中間発表会を実施した。
考察・推論	○部活動を行う生徒のみを視点とせず、部活動指導者や地域との関わりにも目を向けることができた。	○最終的なレポート作成の参考となるようグループで再度発表会を実施した。
参考	○研究内容を発表する準備を進める。成果物がレポート・パワーポイント・発表原稿・ポスターであると確認できた。	○提出する成果物は何か、締切はいつまでかを明確化して再確認させた。

※担当した生徒に意識させたのは次の3点である。

- 1, 常に当事者意識を持つ（ひとごとではなく自分ごととして）
- 2, ゴールを明確化して逆算する
- 3, 単なる調べ学習にしない（可能であればアンケート調査を実施する。地に足のついた研究）。

この3点は、今後、他の研究や学習に取り組む際、進学先で研究に取り組む際、社会に出て働く際にも重要となる、汎用性の高いものである。そのような資質が今回の課題研究を通して身につくよう指導した。

事例（提言Ⅰ）

テーマ

地方創生には何が足りないのか

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<ul style="list-style-type: none"> ・各自治体が行っている地方創生政策にはどのようなものがあるのか調査したいと考えた。 ・事例は多数あり、かつ内容が多岐にわたるため、調べたうえで分類することにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・担当者と生徒で協働し、インターネットを用いて研究に関連する資料の収集を行った。 ・書籍やHPで公開されている地方創生事業の事例報告を確認するよう助言した。
課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・地方創生事業の問題点を見だし、改善策を提案したいと考えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地方創生事業を内容に応じて分類し、評価するよう助言した。 ・評価項目ごとに点数化して、問題点が明確にわかるよう工夫させた。
課題の探究	<ul style="list-style-type: none"> ・地方創生事業を点数化して評価することで、 ①事業を計画する人材が不足している ②事例が多岐にわたるため、成功例を他の自治体などが参考にしにくいことがわかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ内の研究発表会を随時行い、指導者もメンバーと一緒に質問した。 ・点数化によって明確になった複数の問題点のうち、1～2点に絞ってより深く調査していくことを助言した。 ・地方創生事業の評価については、レポートの別添資料としてまとめることを助言した。 ・近隣の地方自治体の関係部署に、地方創生事業の実際について質問することを提案した。
考察・推論	<ul style="list-style-type: none"> ・地方創生事業がうまく機能するための組織体制モデルを考案し、提言しようと考えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・何をもって「うまく機能している」といえるのか、研究当初に設定した地方創生の定義に沿って提案することを助言した。
新たな展開	<ul style="list-style-type: none"> ・提言した地方創生事業の組織体制モデルが、近隣の自治体で適用できるかどうか検討したい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に地方創生事業を企画立案してみることを提案した。

※地方創生事業は自治体によって千差万別であり、その1つ1つの事例を調べることは大変であると予想された。したがって、地方創生事業の内容に対していくつかの評価項目を設定し、点数化することを試みたところ、地方創生事業に共通する問題点がいくつか見えてきたことが功を奏した。

事例（提言Ⅰ）

テーマ

フェアトレードの現状と今後

各過程	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<ul style="list-style-type: none"> ○ 社会科の授業でフェアトレードについて学び、関心を持った。 ○ 自分の好きなチョコレートの生産を将来に渡って持続的にしたいという個人的動機と結びついていた。 ○ 夏休みに語学研修へ行くカナダが、地域的にフェアトレードに対する取り組みが盛んであることから、そこでの調査に意欲を見せていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ フェアトレード商品の現状について、書籍やインターネットを通じて調べるよう指導した。特に、公式情報を重視するように指導した。 ○ 社会問題は要因が複雑であることが多く、単純な解決法が提案できない可能性を念頭に置き、既に提案されている解決案を批判的に吟味するよう指導した。
課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○ カナダの人々のフェアトレードに対する意識を明らかにすることを課題とした。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 調査方法ありきで課題を決めるのではなく、文献に基づいて問題の所在を明確にするよう指導した。
仮説の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○ カナダの人々は、フェアトレード商品を購入する頻度や動機が高いという仮説を設定した。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「フェアトレードに対する意識」という抽象的に設定された課題を、具体的に調査可能な内容として、言い換えを考えさせた。
検証計画の立案	<ul style="list-style-type: none"> ○ カナダの街頭での聞き取り調査を立案した。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 語学研修の途中で実現可能なように、スケジュールを立案させた。
結果の処理	<ul style="list-style-type: none"> ○ フェアトレード商品の購入経験、購入頻度、購入理由、非購入理由という4つの調査項目で整理し、項目ごとにExcelを用いて集計した。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ グラフの活用の仕方を指導するとともに、仮説と異なる気付きがあれば、それが明確になるように指導した。
考察・推論	<ul style="list-style-type: none"> ○ カナダでの調査結果が集計できたが、そこから具体的な「提言」をまとめることに困難を見せた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ カナダでの調査結果から日本に還元できる要素を見いだせないか助言した。
参考 新たな展開	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究発表の準備をしながら、この一回の提言ですべてが解決するわけではなく、継続的に考えていくことが重要であると気付くようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 短時間で結論がわかりやすいよう、プレゼンの構成を工夫させた。 ○ 発表資料を作成する過程で、自身の考えを明確化するよう促した。

事例（提言Ⅰ）

日本は「シルバー民主主義」化した社会なのか

各過程	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<p>○生徒の問題意識が浅い。</p> <p>・生徒は身の回りの中で「優先席は本当に必要なのか」という問題意識を抱いたが、直感的なものであり、社会でどのような問題なのかの把握が不十分であった。</p> <p>・色々な資料や書籍を見る中で、日本の高齢者福祉をとりまく問題（シルバー民主主義）という用語を発見し、言葉が生じた背景を探る中で、優先席にとどまらず、広く社会の中で問題となっている世代間格差に着目するようになった。</p>	<p>○書籍・資料の紹介</p> <p>・地理歴史公民科の教科書・資料集や、担当者が所有する書籍や、図書室にある書籍を紹介する。その中で、生徒が自分の調べたいテーマを具体的にさせる。</p> <p>・生徒の疑問や理解不足については、生徒が気づいていない視点や考えを示唆することで、生徒が調べる必要を自覚するように促す。</p>
課題の探求	<p>○調べてきた内容をグループで共有する。</p> <p>・高齢者と福祉という共通のテーマの問題意識をもったグループ内で情報を共有する。</p> <p>・他者に伝える中で、論理の飛躍や自らの理解不足や、根拠となる資料が不足していることに気づく。</p>	<p>○研究の中で不十分な点を明確にし、研究の進め方に助言する。</p> <p>・担当者もグループに参加し、質問をする。</p> <p>・自分の意見を補強する資料だけでなく、意見に相反する資料はないか探すように指示する。</p>
考察・推論 （課題解決への道筋を考える） まとめと今後の展望	<p>○レポートの大枠を作成する。</p> <p>・自分が扱う問題がなぜ問題なのかの説明ができるように準備する。</p> <p>・探求を進めることで、色々な視点から社会の物事を考える必要性に気づく。</p> <p>また、自分が考えている社会の問題についても、社会の様々な人がそれぞれの視点から考えていることを理解する。</p>	<p>○レポート作りのサポートを行う。</p> <p>論理の飛躍や根拠を伴った主張となるようにチェックする。</p>

事例（提言Ⅰ）

テーマ

ファッションから見る環境問題

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	○環境問題や発展途上国の貧困に対して貢献できる策としてエシカルファッションという切り口を知ったが、認知度の低さが問題点であると認識している。 ・エシカルファッションの定義や実際に認知度がどの程度なのかという数値的データは持っていない。	○エシカルファッションはどう定義されているかを確認することを促した。 ○自分たちが自ら課題を発見し探究する課題研究の活動にするため、グループのメンバーでブレインストーミング・KJ法を行い、エシカルファッションの何が問題点なのかを明確にする活動を行った。
課題の設定	○ブレインストーミングなどから得られた問題点を整理し、調査すべき事柄を設定する。 ・定義、制度（どうやって成り立つのか）、対象（購買層など）、環境への貢献手段、製品の種類、原材料費や売値などの金銭面、認知度の6つに分類された。	○分類された6つすべてについて一通り調べて、Wordの文書にまとめてくるように指示した。 ○日本にもエシカルファッションに取り組む人があるはずなので、その意見を取り入れることができるように、日本国内での取り組み例を探るように促した。
仮説の設定	○調べた事柄からエシカルファッションの認知度の低さの原因をさぐる。	○課題設定が自分たちで検証可能なものである必要があることを確認する。
検証計画の立案	○分類された6つについて調べる。 ○エビデンスを得るために新聞各紙の記事のキーワード検索を行い、記事の総数や全体記事に対する相対度数を調べる。 ○エシカルファッションに取り組む店舗に連絡を取り、エシカルファッションについての実際について聞き取りを行う。	○校内からは朝日、毎日、読売の関係書誌の記事をインターネット検索できるので利用することを提案する。 ○実際にエシカルファッションに取り組んでいる店舗への取材については、その依頼方法などを指導する。また、教員からも別途協力依頼を行う。
結果の処理	○調べた内容をグループで相互に発表しあい、その内容から新たな疑問点や足りない部分などについて意見を出し合う。	○問題点が明確になっているか、エビデンスはあるかなどに注視する。
考察・推論	○新たな意見や疑問について取り組む。	○エビデンスをいかに揃えるか。
参考 新たな展開	○研究内容を論文の形にまとめプレゼンテーションの準備を行う。 ○他のグループとの交流を行う。	○論旨が伝わる内容になっているか。 ○新たな視点や不足について考えさせる。

※担当したグループ3人がそれぞれの課題を持っていたが、3人で協力してそれぞれの研究課題のどこにどんな問題点があるのかを明確にする活動をそれぞれのテーマについて行った。今回はブレインストーミングとKJ法を用いたが、質問や問いを立てるというよりは問題点を明確にすることがこの度のテーマについてはまずは先決であると考えこの方法を選択した。テーマによっては「質問づくり」の活動などを通して問いを立てていく活動も考えられる。仮説の設定や考察・推論についてはどうやってエビデンスを得るのかに注意させた。特にフェアトレードやエシカルファッションはその在り様からよいものであるという思い込みがあり、それが推論や調査のさまたげとなる可能性もあるので、その主張の根拠となるデータを必ずつけることを考えさせた。また、実際にそれに取り組む人から見て初めて分かることもあるはずなので、机上の空論にならないためにも実際にエシカルファッションに取り組む人へのインタビュー調査をすることを提案した。

事例（提言Ⅰ）

テーマ

食糧不足にどう立ち向かうか

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	<ul style="list-style-type: none"> ○食糧難に関する淡い理解しかない。 ・食糧不足の問題がどれくらい深刻なのか、どこで深刻なのかなど、実態やデータを十分に把握できていない（どのような問題なのかの把握が不十分）。 ・食糧不足問題をなぜ解決しなければならないのか、どのような事象とつながっているのかなどの説明がうまくできない。（なぜ問題なのかの理解が不十分） ・具体的にどのような対策がなされているのかを知らない。（現状把握、事例研究が不十分） 	<ul style="list-style-type: none"> ○書籍・資料を紹介する。 ・担当者が所有する書籍、図書室にある書籍を紹介し、まず生徒に最も関心のある書籍を1冊読ませる。 ・生徒の疑問や理解不足については、必要に応じて適切な資料を提示し、理解を促す。 ・社会問題については、既に様々な解決策が実施されているので、どのような事例があるかを調べさせることを重視する。
課題の探求 （グループ内ミニ発表会を何度もやる）	<ul style="list-style-type: none"> ○調べてきたこと、読んできた本の内容をグループメンバーに説明する。 ・うまく説明できないところは理解が不十分なところであることを自ら気づく。 ・説明することで、より多くの根拠が必要であることを自ら気づく。 ・メンバーの説明を聞いて、自分の研究内容とのつながりに気づき、自分の研究内容の理解が進む。 	<ul style="list-style-type: none"> ○不十分な点を明確にし、研究の進め方について具体的にアドバイスする。 ・指導者もメンバーと一緒に質問する。 ・調べてきた内容と質問の内容をふまえて、読書と調査を進めさせる。 ・できるだけ複数の書籍・資料に当たるのがよいので、生徒の関心の広がりに応じて書籍・資料を紹介したり、一緒に探したりすることを心がける。
考察・推論 （課題解決への道筋を考える）	<ul style="list-style-type: none"> ○レポートの大枠を作成する。 ・自分が扱う問題がどのような問題なのか、なぜ問題なのかを簡潔に説明することができる。 ・事例に基づいて、どのような解決策が優れているかを比較検討できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○事例研究のサポートをおこなう。 ・さまざまな解決策の優れているところ、特徴に着目させる。 ・課題を解決したい地域、場所にそれが当てはめられるかどうかなどを検証させる。
まとめと今後の展望	<ul style="list-style-type: none"> ○研究内容を発表する準備を進める。 ○探求を進めれば進めるほど、多岐にわたって理解を進める必要性に気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○論理の飛躍や根拠のない主張にならないようにチェックをする。

※担当したメンバー3人が全員食糧問題に関する研究を望んでいたため、食糧問題に関する書籍を渡し、書籍の内容をそれぞれが事前に学習し、学んだことを発表し合う読書会形式の研究方法を採用した。食糧問題に関心があるといっても、雑駁な知識と理解しかもっていないため、まずは知識と理解を相互に協力して深めていく作業が必要だと考えたからである。研究の過程で、食糧問題は複数のアプローチがないと解決できない問題であるという理解を生徒自身もつに至ったため、共同研究という形で研究発表できるように方針転換した。これにより、自分の研究では解決しがたい問題やフォローしがたい点などを明らかにしつつ、他のメンバーがそれを解決できフォローできるような対策は考えられないか、といったかたちで、複数の視点から協力して問題解決に向かうという研究を進めることができた。

事例（提言Ⅰ）

テーマ

現在の小・中学校教育におけるLGBTの扱いとこれからのについて

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	○テーマの内容については、小学校・中学校時代の自身の周囲の経験から、関心を持っていた。 ○知識については、テレビドラマやニュースでの報道によるものであった。	○グループの生徒2名(本生徒含め3名)と担当者の4名で、質疑・ブレインストーミングを繰り返しながら進めていくことにした。 ○キーワードになりそうな「言葉」については定義を確認しておくように促した。
課題の設定	○次の点を整理することとした。 ・言葉の定義と変遷 ・現代的な問題点 ・国内での事例 ・海外での事例	○言葉の定義を確認させるとともに、国内の教育現場での事例や保健体育などの学習指導要領の記述を探り、また、アンケートなどの実態報告を分析するように指示した。
仮説の設定	○LGBTの理解を促進する立場で、公教育における効果を考え、提言することとした。	○海外との取り組みの違いを述べるだけにとどまらないように注意をした。
検証計画の立案	○課題設定した項目について、できるだけ多くのことを調べておく。 ○学校現場を想定し、学校での具体的な場面を想定して、集めた資料を分類する。 ○上記項目の効果の検証を考察する。	○インターネットの活用。 ○校内で入手可能な資料の確認。 ○指導者やグループのメンバーの質問に回答しながら分析を整理することとした。質問に回答できない場合は、次回までに調べてくるようにさせた。
結果の処理	○日本での事例としては、学校制服の扱い、学校での講演による啓蒙活動、授業の実態、トイレの実態の4項目について確認ができた。 ○この4項目について、海外の事例と比較することとした。	○各所に手紙を送って質問に回答をお願いする方法も考えたけれど、時間的な余裕もなく、断念することになった。 ○左の4項目について、有効な点を見出すように指摘した。
考察・推論	○項目をそろえたために、比較についてはやりやすそうだった。 ○考察については、現状の報告にとどまりそうで悩んでいた。 ○制度面と授業面に分けて考察した。	○調べ学習にとどまらないように、自分なりの分析視点と提言をするように指示した。 ○新たに分かったことから制度面と授業面について。
参考 新たな展開	○要旨の作成。 ○グループ内での発表。	○要旨の内容の確認。 ○研究活動についての感想。

※グループ内だけの質問や意見・助言には限度がありそうだったので、テーマの近い他のグループの協力をもらって、2グループ合同でお互いに質疑応答や助言をし合う場を設けました。生徒たちには、ゴールが見えたようで、効果的だったようです。

事例（提言Ⅰ）

テーマ

農家の収入アップ

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	○生徒の親戚が農家をやめたということから農業離れの問題に関心をもち、課題として把握しているが、農業の問題についての表面的な知識しか持っていない。	○日本の農業の現状や課題に関する書籍を通じて、農業の問題についての概要を理解させることを促した。
課題の設定	○農業離れの背景に農業と他産業との間の所得格差があることに着目し、「どうすれば農家の収入を増加させることができるのか」ということを課題に設定した。	○農業について調べた中から、特にどのような問題に関心をもちたかを聞き取り、研究するテーマの決定のためのアドバイスを行った。
課題の探究	○文献やインターネットを利用して研究を進めていった結果、 ・農業の現状・実態を把握する。 ・農業の所得が低くなってしまふ背景を分析する。 ・農家の所得向上のための取組みとして行われている6次産業化に着目し、詳しく調査を進めることにする。 ・6次産業化の具体的な事例の分析を通して、そのメリットや問題点を把握する。という手順で研究を進めた。	○調べてきた内容を小グループで発表させ、質問や疑問点などを他の生徒に挙げさせた。 ○他の生徒のコメントをふまえて、今後の研究事項についてのアドバイスを行った。 ・日本の農業では所得が低くなってしまふ（ケースが多い）背景にあるものを、自然条件の面や経済的な面、行政的な面といった複数の側面から調べるようアドバイスを行った。 ・6次産業化について、具体的な事例を探して分析するよう促した。
考察・推論	○6次産業化によって農家の所得を向上するために必要なことに関する考察を深める。 ・6次産業化の成功事例の分析を通して、6次産業化で成功するための条件・要素を抽出した。	○調べてきた事例について比較・考察させる。 ・失敗事例と成功事例の違いを注意深く比較させ、成功するためのポイントになる部分に着目させる。
まとめ	○研究内容を論文にまとめ、発表のためのプレゼンテーションの準備を進める。	○論理性のある展開になっているか、要点が上手にまとめられているか、わかりやすい資料になっているかをチェックし、アドバイスをを行う。

※担当した生徒3名は、農業の問題に関心をもち、それぞれ「農家の所得向上」「食料自給率の問題」「稲作の転換」と少しずつ分野に違いはあるものの、共通して農業に関するテーマを設定した。そこで、最初は、日本の農業が問題を抱えている背景や解決のための方策について、共通に各自で調べさせ、調べた内容を互いに発表して共有するようにした。その後は、定期的に情報交換会を行いながら、そこで出された質問や意見を参考にしながら、不十分な点や今後さらに調査すべき点などを確認して研究を進めることができた。

事例（提言Ⅰ）

テーマ

ふるさと枠はうまく機能するのか

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握と設定	<p>○進路志望から「医療に関する問題」という大枠はあったが、研究テーマを具体的に絞り込めていなかった。</p> <p>○現時点で想定する将来の職業人像として、先端医療など科学技術に関わる視点よりも、医療現場や生活環境などの制度設計に関わる問題の方が、「働く」イメージとしては現実的で見通しを立てやすい。</p>	<p>○「医療」について何が問題とされているのか、Web 上での検索だけでなく、進路資料や小論文問題集など、高校生が身近に触れることのできる参考図書をあたり、具体的項目を書き出してみる。</p> <p>○共通した興味を持つ同じグループのメンバーで意見交換をして、自分にはない視点を広げる。</p>
仮説の設定	<p>○生徒自身の経験や、家族が医療従事者であることから、地方における医師不足の問題を取りあげ、具体的には広島県・広島大学の実施する「ふるさと枠」制度を考察する。</p> <p>○奨学金支給と所定年限の勤務地制約という、経済と自由との交換が成立するのかという対立軸を通して考察を進める。</p>	<p>○本研究で取りあげる広島県・広島大学の「ふるさと枠」制度以外にも、各地で実施されている同趣旨の制度も調査し、制度の共通性から、地方の問題と国全体の問題との関連を理解する。</p>
検証計画の立案	<p>○制度の当事者である医学部生や医師個人の意見・感想を重視したい。</p> <p>○医療現場での実地調査やインタビューを行いたい。</p> <p>○制度に関する行政のデータは、県のHPやWeb ページ「ふるさとドクターネット広島」から収集する。</p>	<p>○個人の意見・感想だけでなく、制度の運用者である行政や病院の評価との両面から考察を進める。</p> <p>○数値化されたデータと、その背後にある各個人の意見・感想とをバランスよく扱う。</p>
結果の処理	<p>○全体傾向として地域医療が医師不足に陥っている現状と、一方で「ふるさと枠」制度によって地域医療を指向する医学部生が着実に育ちつつある状況を理解する。</p> <p>○医学部生・医師の、地域医療への積極的な熱意と、一方で僻地勤務のネガティブな側面への指摘があることも理解する。</p>	<p>○議論のための議論ではないので、肯定・否定のどちらかに決める必要はない。</p>
考察・推論	<p>○経済と自由との交換という対立を超えて、「ふるさと枠」がもたらす地域の生活の向上を理解することから、医療のあり方や医師のめざすものについての視野を広げることができた。</p>	<p>○医療の役割や医師のあり方について、他の問題についても興味を広げ、関心を持ち続けてゆく。</p>

事例（オーストラリア研修）

テーマ

Global Society and Japan : A Questionnaire on intercultural communication between Japan and Australia

研究のプロセス	生徒の状況	教師の指導助言等
課題の把握	生徒は強い課題意識を持ってこの研修に臨んでいるわけではない。 外国の人たちと英語でコミュニケーションをとりたいという欲求は強い。 質問を作る作業で、ある質問から連想しまたは影響を受けて次の新しい質問が生まれるという場面が多く見受けられた。 活動の結果、オーストラリア研修では英語でのコミュニケーションに関する質問が残ったので、それをそのままこのチームの研究課題とした。	「質問づくりの活動」を行い、合意形成を図りながら、自分たちの研究テーマを定めさせる。ルールに沿ってできるだけたくさんの質問をつくり（発散思考）、その中から重要と思われる高い3つの質問を選ぶ（収束思考）。 事前に質問づくりのルールの評価をさせておいて、実際にルールに沿って活動させると、その後振り返りをさせるときに大いに役に立つ。
仮説の設定	コミュニケーションを聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの4つの領域に分けて、日本とオーストラリアでこれらの領域に違いがあるのではないかと考え、その評価を明確にするためにループリックを作成した。それを元に日本語でのアンケートと同じ内容の英語でのアンケートを作成。英語のアンケート作成については海外連携校の先生にも協力していただいた。	英語を使ったコミュニケーションにおいてどのような問題点があるのかを明確にするためアンケートをとる方法などを提案。アンケートをとるにあたって、コミュニケーションを4領域に分けるという案は生徒から出てきたので、その後の集計やデータの提示をわかりやすくするためにループリックを作成することを提案する。アンケート内容のチェックは複数の教員で実施。
実地調査	日本語のアンケートは同学年の生徒に協力を仰いだ。英語のアンケートについては事前に海外連携校の生徒に協力してもらった。実際にオーストラリア・シドニーでもハイドパークや植物園、ニューサウスウェールズ州立大学などでアンケート活動を行った。	旅程の中でアンケート活動ができるように調整を行った。海外連携校には教師からメール添付でアンケート用紙を送り協力を依頼した。 現地でのアンケート活動では、見回り等を行い生徒の安全を確保しつつ活動を行った。
考察・推論	ループリックの形にしていたためアンケート集計が比較的簡単にできた。統計処理を行い、どこに有意差があるのかをきちんと出すことができた。 アンケートから見えてきた特性や問題点・課題を整理し、次への提言とした。	アンケート結果を集計し結果を導き出す際に、主張が有意か否かを判断するためにどのような統計処理があるかを教え、適切な統計処理をするように指導した。具体的な統計処理の方法については教師が指導した。
参考	「たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」」ダン・ロスステイン、ルース・サンタナ 新評論	

※質問づくりの活動を行うことで、自分たちの研究課題を決めるための合意形成を行い、全員が納得した形で研究課題を設定することができた。現地でのアンケート活動をすることで、そのための準備から実行に至るまでの過程すべてが生徒の学びにつながっていた。統計処理を施すことで主張の元となるエビデンスを数値的に示すことが可能となった。

平成27年度指定

スーパーグローバルハイスクール 研究開発課題研究指導事例集

令和元年11月発行

広島大学附属福山中・高等学校

〒721-8551 広島県福山市春日町五丁目14番1号